
IS ~ インフィニットストラトス ~ イージスの剣

助独楽士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニットストラトス） イージスの剣

【Nコード】

N8178S

【作者名】

助独楽士

【あらすじ】

世界で2番目にISを動かしてしまった少年、天城 澄はIS学園へと転校する。

織斑一夏やクラスメイトと出会い大切なものを守る為に闘う。

転校生？（前書き）

初めての2次創作ですので皆さんドシドシご意見お願いします。
誹謗中傷は引きこもりの原因となりますのでご意見までをお願いします。

転校生？

…あなたはなぜ力がほしいのですか？…

「愛する人を守りたいからさ」

…愛する人を守ってどうするのですか？…

「愛する人とずっと愛し合いたい」

…では永久の愛を守る力を授けましょう…

第1章 第1話

（ヘッドホンで音楽を聞きながらすごすのもやたらと新鮮味があるな）

天城^{あまぎ} 澄^{すみ}は外の眺めをみながらそんな事を考えていた。外は一面の海。ただモノレールの進行方向には白い建物がやたらと目立つ島が迫ってきていた。

（あれがIS学園かあ）

IS学園とは…

ISの操縦者を育成するのを目的とした教育機関であり、その運営および資金調達は原則として日本国が行うものとする…中略。ごめん…めんどづくさくなった。

なんでこうなったのか：それは簡単な事。ISを動かしてしまっただからだ。

本来、ISは女性にしか動かせない代物なのに、ふとしたきっかけでISに触れたらなんだか白い光が俺を包み込んでいつの間にか『打鉄』とかつていうISを装着しちまった。

その後には、検査に続く検査。日本政府の人間は来るわ、保護プログラムだとかってやつので引越すわでまともな生活は送れなかった：

(ごめんな。父ちゃん、母ちゃん、静香)

極めつけがIS学園への転入。せつかく4月から新しい高校に通って友達が出来たのにIS学園にいるのが一番安全だと言う理由でIS学園に入る事が決まっちゃった。まあ学費は政府持ちだから助かるけどね。

「間もなくIS学園、IS学園です」

「すみません。転入生の天城 澄です」

門の受付の警備員に職員室の場所を聞こうと声をかけるとすぐに職員室に電話をかけてくれた。

門から見るIS学園は改めて世界中の中心である実感が湧いてくる。世界中のIS操縦者を目指す女性が集まってきている場所であり、選ばれし者の競う場所。

(俺、こんな場所やっていけるねかなあ…)

「お待ちせしました。天城君のクラスの副担任の山田麻耶です」
声をかけてきた女性は背が低くて大きめの眼鏡をかけてダボダボの

服を着たやたら母性が大きい人：本当に先生なのか？

「あつ、いえ、わざわざありがとうございます。天城 澄です」

「ではまずは教室に行きましょう」

そう言つて敷地の奥の方へと山田先生が歩き出した。

(いつか転けるな)

それぐらい歩き方が危うい感じなのだ。

「天城君は1年1組です。織斑一夏君と一緒にのクラスですよ」

織斑 一夏

世界で初めてISを動かした男性として世界中に衝撃を与えた男。

そして姉は世界一のIS操縦者で世界最強の照合『ブリュンヒルデ』を持つ女性、

織斑 千冬

である。

「そうなんですか。楽しみですね」

仲良くしなきゃな…この学園で男は彼と2人だからなあ。

しばらく歩いて職員室に着くと外で待つように言われキョロキョロとしていた。

「お前が天城 澄か」

突然妙にドスの効いた女性の声で話かけられた。

あれ…この人ってたしか。

「私がお前の担任の織斑 千冬だ」

やっぱり！最強のIS操縦者だよ。

「天城 澄です。よろしくお願いします」

「うん。教室に行くぞ」

ビジネススーツを着て出席簿を持って颯爽と歩く後姿は最高に格好いい。惚れ惚れとしてしまう。

「同じクラスに私の愚弟がいる。色々と教わるといい。」
愚弟ですか…

「はい。わかりました（きっと弟がかわいいんだな）」

「天城、なんか言ったか？」

え…考えが読まれた…

「いいえ、返事をしただけです」

少し歩くと1年1組と書いたプレートが見えた。

「ここだ。入れと言ったら入ってこい」

そう言い残し教室の中へと入っていった。

（自己紹介とかするよなあ…趣味は釣り？好きな食べ物は麺類、好きな色は青、絶賛恋人募集中…なんて言ったら今後が大変になるな）

「入ってこい」

教室の中から織斑先生の声が聞こえてきたので教室の中に入るとそこには…女の園が広がってた。

（うわぁ…キツイ…キツイすぎる）

「転人生の天城だ。天城、自己紹介をしろ」

「天城澄です。横浜から転入してきました。よろしくお願いします」
ペコツとお辞儀をすると、

シーン…

(え…今ので滑っちゃうの?) 少し冷や汗をかき始めたたん、
「………キヤー………!!」「………」
いきなり特大の(黄色)悲鳴が 教室に響いた。

「えっ!? 2人目の男子生徒!?」「これって大チャンス!?!」

「やった…織斑×天城が描けちゃう」

「普通って最高ランクよねえ\\\\」

色々な意見、ありがとうございます。BLは勘弁してほしいけど…

「お前ら! いちいち騒ぐな! 天城お前は織斑の隣に座れ。織斑の隣の奴らは一つずつ後ろの席にずれる」

織斑先生が指示を出すとさっきまで騒いでいた女子達は一斉に動き出した。

一応会釈をしながら席につくと織斑 一夏が嬉しそうな笑顔で会釈をしていた。

「よし。今日の連絡事項は特にない。今日も勉強に励めよ。それと織斑、天城のフォローをしっかりとやらせよ。以上」
そう言うと織斑先生は教室を出て行った。

「俺は一夏だ。よろしくな。」「ああよろしくな。俺の事は澄って呼んでくれ。織斑は一夏でいいか?」

「ああ、いいよ」

これが俺の織斑姉弟との出会いだったんだ。

転校生？（後書き）

まだまだISは出てきてません。

俺的にはシャルルが好きなんですよね〜

幼なじみ？（前書き）

連日投稿成功！

この調子で行きたいなあ…

出来れば今日中にもう一話投稿したいですね。

幼なじみ？

教室では俺と一夏の周りだけに女子が集まり俺は質問攻めにあっている。目測、クラスの人数より多い！？

質問が一番多かったのは

「彼女はいるの？」

だった。今までこんなにちやほやされたことなかったからなんだか優越感を感じてしまった。けど、それも午前中で疲れたきってしまった。

「澄、飯にしようぜ。食堂でいいだろ？」

一夏に誘われるが

「いや：人のいない所に行きたい：」

俺の疲れた様子が酷く見えたのか一夏は苦笑していた。

「じゃあ屋上にするか。なあ筈、セシリア、澄を屋上に案内してやってくれないか？俺はみんなの分のパンと飲み物を買ってくるよ」
そう言つて一夏は教室を出て行った。

そこにはロングの黒髪をポニーテールにしてちよつと大きめの母性をもった女子と、金髪のロングヘアをロールさせてクルクルさせたお嬢様っぽい外国人がいた。

「では行くか」

「そうですね」

「あつ二人とも、自己紹介させてくれないかな？」

振り返る二人に笑顔で答える。笑顔はコミュニケーションの潤滑油

「ああ、すまない。私は篠ノ之^{しののけ}箒だ」

「天城 澄です。澄って呼んでください。よろしく」

右手を差し出すと篠ノ之さんは一瞬ビツクリした顔をしたけど握手をしてくれた。

「次は私ですわね。私はイギリスの代表候補生のセシリア・オルコ

ツトですわ」

腰に手を当てる胸をはって自己紹介をしてくれた。きっとプライドが高いんだろうなあ。

「代表候補生ですか：専用機持ちと知り合いになれるのは光栄ですよ。よろしく」

篠ノ之さんの時と同じように右手を出すとセシリアは慣れた感じで握手を返してくれた。

「では、屋上に向かうとしよう」

3人で教室を出て行く。後ろのほうでは

「いいなあ：私も一緒に行きたいなあ」

って声が聞こえてきた。

屋上の芝生に座って肩を落としていると一夏がやってきた。

「澄、その気持ち良く分かるぞ。1週間我慢すれば終わるからさ。

俺は算がいたからまだ助かったけどな」

篠ノ之さんを見ると赤くなっていた。

あつ…

これは…

「そうなのなあ。篠ノ之さんと入学前からの知り合いだったのか？」

「ああ、小学校1年から4年まで俺が算の家の剣道場に通ってたんだ。だから幼なじみだよ」…って事はそんな時から篠ノ之さんは一夏に惚れてんな。

「羨ましいなあ。篠ノ之さんは…あれ？もしかして篠ノ之さんってあの篠ノ之博士の関係者？」

世界の軍事バランスを崩壊させてさらに経済の構造さえ変えてしまった天才科学者、篠ノ之 束。

「私とあの人は関係ない！！」ああ、身内かな。

「そうなんだ。ごめんごめん、名字が一緒だったからちょっと気になっただ」

あまり振れられたくない事みたいだな。そっとしておこう。

「みんな、飯にしようよ」

一夏が場を和ます為なのか良いタイミングで声をかけてくれた。

ナイス一夏！！

「篠ノ之さん、オルコットさん好きなの選んで」

一夏が買ってきたパンを先に選んで貰おうと差し出す。

「澄さん、私の事はセシリアとお呼びください。一夏さんもそう呼んで下さってますわ、ポッ」

うおっ！またまた…

セシリアもかよ。

「なあ…一夏」

「なんだ澄」

「学園ライフをエンジョイしてるんだね」

「ん？いきなりどうしたんだ？」

「いやな…なんとなくな」

それぞれ楽しくパンを食べているが…

「一夏さん！どうぞ私のパンを一口どうぞ！」
だの

「一夏！わっ、わたしのパンも食べる！」
だの

「篠ノ之さん！一夏さんは私が面倒見ますからほっといってください！」

だの

「一夏！その…お前はわたしが…みる」

「なんで2人はこんなに仲が悪いんだ？」

ってな感じで一夏が相当の林念仁でフラグを立てまくる男と言つのが分かった。

織斑先生が『愚弟』って言った理由ってこの事なのかな？

「なあ、篠ノ之さん」

「箒だ」

「え？」

「箒って呼べ」

「あい、箒は苦労するなあ…一夏で」

箒は顔を真っ赤にしたがすぐに俯いた。

「まだよく分からないけど俺は箒を応援するから頑張つてガッツポーズをとって笑つてみた。

セシリアに見られてはなにか心配になったが問題はなさそうだ。

箒はかなり可愛い笑顔を見せてくれた。

あつ…箒ってかわいい…

今日初めて一夏に腹がたつた。

幼なじみ？（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしておりますーふ

教師と生徒は世間体？（前書き）

眠い…

教師と生徒は世間体？

昼休みも終わり午後の授業が始まった。

午後は山田先生のISの基礎知識だが…

「わかんねえ…」

つて声が隣から聞こえてきた。

入学時に貰った『必読』の分厚い本に書いてあった内容なのになんで分からないんだ？

「一夏、あの分厚い本はちゃんと読んだのか？」

俺は1週間かからずに読んだ。

「いや…電話帳と間違えて捨てた。その後に千冬姉に貰ったけどまだ読めてない…」

織斑先生、愚弟って言葉はきつと一夏の為にある言葉なんでしょうね。

「そつか。それじゃあ今日の放課後から一緒に勉強しようか？」

みんなで教え合うのもなかなか楽しい勉強だからね。それに代表候補生のセシリアはかなり知識があるんだろうな。

箒も喜ぶだろうしね。

「おっ、いいねえ。ただセシリアと箒と一緒に毎日、アリーナで実機訓練してるからその後ならやってもいいぞ」

実機訓練かあ…

「俺も参加させて欲しいな。入学が遅れた分、少し遅れているからね」

「いいぜ。箒もセシリアも駄目とは言わないよ」

嫌な顔はするだろうけどね…

スパアーン×2!!!!!!

「授業中に何を喋っているか馬鹿者!!」

教室中に出席簿アタックが綺麗な音を立てて炸裂した…

痛いですよ…織斑先生…

授業が終わり一夏達3人はアリーナでの特訓に行き俺は山田先生に寮の部屋に案内されていた。

「天城君、初日はどうでした?」

「女子のパワーに負けました。すごく疲れましたよ。」

正直ウンザリしてしまった。予想はしていたけどまさかあんなにパワフルだとは思わなかった。

「そうでしたか、ごめんなさいね。しばらくはそんな状態が続くかもしれないですがくじけないで頑張りましょう」

山田先生は胸の前でガッツポーズをとった。

ブルン…

揺れた…母性が激しく揺れたよ。

「はい。頑張ります」

きつと…俺はここにいたら壊れるかもしれない…

自分の部屋に着き荷物を置くと案内を終えた山田先生が出て行くところ。

「山田先生待ってください」

「えっ！？なんですか!？」

「あの…お願いがあるんですが…」

放課後のISの貸し出しの申請の仕方を聞こうと思っている。けど…
…なんで顔を赤くしてるの？

「なっ、なんですか…あの…初めてですから…その…やさしくしてくださいね…でも…まだ私たちは出会ったばかりで…それに教師と生徒では世間体がよくないですし…」

…山田先生もなのか。

「あの…放課後にISを借りたいのですが、その申請の仕方を教えて頂きたいのです」

真面目に喋ると山田先生はさっきよりもさらに真っ赤になりまさに『しまった』って顔になった。

「あっ!?!ごめんなさい!そうですよね!分かりました…ちょっと…では職員室で申請出来ますから行きましょう」

部屋から出て職員室に向かいながら山田先生と話をしていた。 「

山田先生は専用機は持つてるんですか？」

「ええ。持ってますよ。ラファール・リヴァイブですよ」

やっぱりそうなんだ。

「…って事は山田先生も代表候補生なんですか？」

「いいえ、元代表候補生ですよ」

失礼な事を聞いちゃったかな…「やっぱり代表候補生だったんだから腕も凄いんですよ…」「そんな事ないですよ。天城君も頑張ればなれますよ。毎日訓練すればなれます!私が保証しちゃいます!」

…なんだかそこまで言われると照れるけど嬉しいかな。

「ありがとうございます。山田先生にそんなに言われたんだか山田

先生の為にも頑張りますよお」
山田先生がまた赤くなってる…
やべ…下手な事言えないな…

職員室に着き中に入るとコーヒーの良い香りがする。
俺はコーヒーが好きなので急に飲みたくなってきてしまった。
「ああ…天城か」

織斑先生が机に向かいながら顔を上げていた。

「あつ、織斑先生」

「今日1日どうだった？一夏とは仲良くなれそうか？」

一夏？織斑先生は織斑って呼んでたよな？

「はい、仲良く出来ますよ。ただ…どれだけフラグ立ててるんですか…」

「ふっ…くっくっくっ…そうか！やつぱり立ててるか？」

「それはもう…小学生の時点でもう頭角表してるみたいですね。すでに2本は確認出来ましたよ」

「くくく…そうか、わかった。まあ、あんな奴だが仲良くしてやつてくれ」

「ええ。よろしくお願いします」

頭を下げとお辞儀をすると山田先生がちょうど書類を持ってきた。

「ではこれに書いて提出してくださいね。機種は知ってるでしょうけど、『ラファール・リヴァイブ』か『打鉄』ですからね。天城君はハンデがありますから初回だけ今日中に書類を出してくるなら明日の使用を認めます」

えっ…前日では駄目って事か…

「では明後日の分の書類も頂けますか？」

「え？連日練習をするんですか？」

「はい。一夏とセシリアに教わろうかと思ってますから」

「ああ！そうですね」

また自分の机向かって走っていった。

その様子を俺と織斑先生で眺めて溜め息が出てしまった。

「天城、お前の駆動時間はどれくらいなんだ？検査の時にかなりの時間を動かさなかったか？」

織斑先生は急に真面目な顔をして尋ねてきた。

「あつ、はい。大体：20時間は乗ってたと思いますよ。検査なのにやたらと戦闘的な項目があったり長時間乗せられたりってありました」

俺の答えを聞いて織斑先生は目を見開いた。間違いなく驚きの顔だった。

「そうか。お前は射撃と格闘はどちらが得意なんだ？」

「特に得意はありませんよ。なんだかんだでどっちも嫌いじゃないですし」

実際どっちも平均的らしい。データでも普通よりちょっと上手い程度だと検査員に教えて貰ったし。

「そうか。ならお前は常にラファール・リヴァイブに乗って訓練をしておけ。そしてセシリアから射撃、篠ノ之から剣術を学べ。いいな」

織斑先生からの只ならぬオーラが見えた気がした。

「はい…分かりました」

山田先生から書類を貰い職員室を出て一旦教室に戻ることにした。

もちろん書類を書く為であるが

教師と生徒は世間体？（後書き）

お気に入り登録感謝です m | | m

勇猛果敢？（前書き）

感想を…お願いします？

勇猛果敢？

山田先生から貰ったISの貸し出し申請書を持って教室に戻ると一人の女子生徒が教室に残っていた。どうやら勉強をしているみたいだった。

「復習しているの？」

俺は教室の中に入ると同時に声をかけた。

その女子はビックリしたみたいで急に顔を上げてこっちを見た。

後ろで束ねた蒼みがかつた長い髪の毛が窓からの光で少し光って見えたとて綺麗だった。

「あつごめん。脅かすつもりはなかったんだ。俺は天城、まあ今日転入したばかりだから知ってるとは思うけど…君の名前を聞いても良いかな？」

「うん、ももやまかなで桃山奏だよ。奏って呼んでね。今は復習をしてただけど天城君は？」

「あつ…邪魔しちゃってごめん。俺は練習機の申請するのに書類を書くんだよ。…もしよかったら書いたことがあるんだったら教えてもらえないかな？」

教室に向かいながら書類を見ていたけど文章を作るのが多いので正直困っていた。セシリアに聞いてみようって思っていたのだ。

「別にいいよ。それじゃあこっちに座って」

自分が座ってる席の前を指差してる。

俺は言われたとおりに席に座ると書類を机に置いた。

「よろしく願います。奏先生」

からかい半分でふざけてみたけど

「うん、礼儀正しい生徒さんは先生大好きですよ」

奏さんがのっかってきた。のり良いなあ。

「俺もうれしいです。では先生、名前の欄には何て書いたら良いんですか？」

やべえ〜、調子にのりすぎかな…

「そうですねえ〜『林念神 織斑一夏』って書いておけば分かるわね」

「『ダーハツハツハツハツ！！！！』」
「バンバンバン！！！！」

思わず机を叩いてしまってお腹を抱えて笑ってしまった…

「先生わかりやすつすぎつ！！」

「そうでしょう。あの3人だけじゃないの？分かってないの…なんだからえ見えてイライラするのよねえ。まず女2人はさつさと気持ちを伝えて欲しいわね。変に恥ずかしくて何やってんのかしらね」
おお…いきなり厳しいお言葉。「まあね…」

「大体セシリアのあの変化の仕方もあるからさまよね。」

「すみません…セシリアのきっかけは聞いてないですね」
今日来たばかりの俺には分からない情報なんだな…

「あつ、そっか、クラス代表を決める時に織斑君が推薦されたの。でもセシリアが『男がクラス代表なんて認められませんか！』って反対して結局『クラス代表決定戦』をやってセシリアが勝つたの。でもこういう訳かセシリアが辞退して織斑君がクラス代表になったの。そしてクラス代表決定戦の後からセシリアがあんな調子になったの。間違いなく決定戦の最中になにかあったわね」
腕を胸の前で組んでウンウンと頷く奏さん。名探偵って感じかな。
「へえ〜。そんな事があったんだ。まあ聞いた話だと間違いなく決定戦でフラグたったんだね」
俺も同じように頷いた。

「まあ私には関係ないけど見ててイライラしちゃうのよね」

「まあまあ、俺も昼飯の時にイラついたよ。ところで書類の続きを

お願いしていいかな？今日中に出すと明日使えるんだ」

「へえ、特例だあ。じゃあ明日は私も申請してるから一緒に訓練していいかな？」

願ってもないお願いだ。

「うん。是非お願いするよ。一夏御一行も一緒だからいい訓練になるよ」

やっぱりメンバーが多いとチーム戦も出来るしね。

「じゃあさっさと書いて出しに行こう」

奏さんがやる気を出した。

環境の変化は人格も変えるのかな…こんなに女の子と話したことがないのにスムーズに喋れちゃった。奏さんが喋りやすいからかな

「はい、確かに頂きました。明日の放課後に第2アリーナでラファール・リヴァイブですから忘れないで下さいね」

書類が書き終わり奏さんと山田先生に書類を届けに来た。奏さんはいいでに明後日の書類も書いて先生に提出していた。

「おい、天城」

職員室を出ようと入り口の方を向いた時に織斑先生に呼び止められた。

「はい、何でしょう」

机まで行くと織斑先生は一冊の厚めの本を差し出してきた。

「この本を暗記しておけ。この本はお前向けかもしれない」
差し出された本の表紙には

『戦闘、戦術解説集』

と書いてある。

「私の感じた限りだとお前は指揮官タイプのような。その本で特に

戦闘の流れを知っておけ。そして指揮が出来るようになっておけ」
なんでだ？よく分からないなあ。

知っておいて損はないって事なのかな。

「はい…勉強しておきます」

本を受け取り奏さんと一緒に職員室を出た。

「奏さんはこの後どうする？俺はアリーナに行つて一夏たちの訓練を見てその後勉強会をするけど一緒に来る？」

俺としては来てくれるとうれしいんだよねえ

「専用機持ちの訓練かあ。行く！それと…」

「それと？」

奏さんは俺の方を見てにっこりと笑つて、

「私の事は奏つて呼んでね。『さん』はいらないよ」

ドキつとしてしまった…

可愛い…

「うっ、うん」

顔が赤くなつて見られたんじゃないかと心配になり顔をそらせてしまった…

可愛い女の子は予想以上に強い武器を持ってるなあ…

恋の予感？（前書き）

ユニーク500突破！！

ありがとうござい！

恋の予感？

奏と第二アリーナへと向かっている。

俺の左隣に奏がいて話をしながら歩いてた。

「澄、やっぱりISを動かした時って、あの不思議な…知識の流入みたいなのって感じた？」
「うん。あれは不思議だったなあ」

「だよなあ。触った瞬間にフィッティングが始まる結果かなあって勝手に解釈してるんだよね」

「おお、言われてみればそうともとれる…」

ISに触ると一瞬で触れた物が何か分かり何ができるか悟った。

正直俺は嬉しくなってしまう。これで守る事が出来るって。

「俺さ、なんだか嬉しくなったのを覚えてるんだよね」

「ISが動かせたことが？」

「違う。いや…そうかもね。守るための力が出来たからかな？」

「守るための力？」

「うん。俺さ一昨年に目の前で妹が車にひかれて死んじゃってさ…」

そんな時に…妹が助けられなかったのかって今でも思うんだ。I

Sがあれば守れたって…すぐ後悔した。すぐ悔しかったんだ。

あの時の事を…」

あつ…

思い出しちゃった…

胸が苦しくなつて…

目の前がゆがんで…

喉があつくて…

頭がグルグルまわって…

おかしくなっていく。

うずくまって…呼吸が早くなって…体が震えて…

「澄!！」

俺の背中から温かい物が包み込んだ。

奏が俺を抱きしめてた。

「大丈夫だよ!大丈夫!絶対に大丈夫だから…」

どれくらいの間が経ったんだかわからないけど俺は落ち着きを取り戻したけど…ハズカシイ…

奏の顔を見れない…

発作みたいなものとはいえ、まさか抱きつかれちゃうとは…

結構あつたな…母性…

「ごめん…またやっちゃったみたいだね」

「また…ううん、大丈夫だよ。私の事は気にしないで。発作みたいなものでしょ」

さっきと変わらない奏がいた。

奏は意外と大物なのかも…

「ありがとう。助かった…」

「もう大丈夫なの?」

「うん…大丈夫」

またアリーナに向かって歩き出した。次は無言で…

「何が起きたのかしら…」

奏は戸惑いながらこの光景を眺める。

「いや…俺は簡単に想像できるぞ」

俺は苦笑しながらこの光景にため息をついた。

一夏が箒とセシリアにのされていたのだ。

「一夏！このぐらいでのびるとは情けないぞ！！」

箒は打鉄に身を包みながら打鉄の近接ブレードを一夏に向けている。

セシリアもあきれた顔をしながら

「一夏さん！あなたも男ならもっとしっかりしていただかないと困りますわ」

と言いはなっていた。

「ああ…あ…さすがにこれは織斑くんに同情しちゃうな…哀想に…奏でが苦笑している。」

「おーい！！一夏！訓練は終わりかあ？」

おれも一夏が可哀想になり助け船をだしてあげたよ。

「おお！澄！もう終わったから食堂で待ち合わせでいいよな？」

疲れきった顔だったが俺の顔を見たとたんに明るくなった。明らかに助かったって顔をしている。

「箒もセシリアも一緒に来るんだろう？」

俺が一夏に変わって確認をしてみる。

「なんで私が…」

「なぜ私が…」

「一緒に一夏の勉強を見ようよ」

「行く（ますわ）！！」

はもった…

「じゃあ食堂にいるから一夏と来てくれ。先に行ってるよ」
俺と奏は修羅場アリーナを後にした。

「あの二人って自分たちがやってること自覚あるのかな？」
奏は不思議そうに首を傾げてる。

「さあ…あつたらさ、ああはならないんじゃないの？」

「そうなんだろうけど…もしさ、織斑君が他の人にもフラグ立てたら自滅するんじゃない？」…大いに考えられる事態だな。ってかむしろ間違いなくやるな。

「俺からしたら勝手に自滅しちゃえばって思っちゃうよ。リア充〇ね！ってやつよ」

笑いながら答えると奏も笑ってた。

「そうだけど、今のタイミングで澄君がリア充って言うつとひがみに聞こえちゃうよ」

奏でがそんな事を言いながら俺の肩にポンと手をのせた。

「まあね。男としては羨ましい状況なのは間違いないでしょ。ただタチが悪いのが無自覚ってところでしょ。俺みたいに今までモテてなかった男からしたら一夏の状況はハーレムだろ」
うん。

間違いなくひがみ満載の嫉妬だね。

「へえ〜澄はモテなかったんだ。なんか意外かも」

「え？なんで意外？」

「だって…まず身長、ルックスは悪くない。頭脳悪くない、センス不明、話しても落ち着いた感じだし。意外とポイント高いんじゃない？私は好みだけどね」

あら…笑顔が素敵ですよ。

「そんな事を言われたら惚れちゃうよ」

恥ずかしいなあ…

俺間違いないく赤くなってるよな。

「惚れていいよ。だって澄良い奴っぽいじゃん」

ぐあ…そんな事を言われたら俺、まじで…

「冗談だよ。せっかく面白い学校に来たんだから楽しむのが一番で
しょ。恋愛も人間を成長させる要因だよ」

なんだろうね。奏って大人っぽいよなあ。

こんな女性と一緒にいられたら俺も大人っぽくなれるのかな。それ
とも不釣り合いかな。

「…」

「…」

気まずい…

「あの…奏、さん。」

「なっ、なにかなあ…」

緊張してるよ…うちら

「出会ってすぐで申し訳ないんだけどさ…」

「大丈夫、私は気にしないよ」「うっ…緊張する…」

「…今週の日曜日に買い物に付き合ってくれないかな」

「で…言いたいことはそれだけ？」

ちょっと怒り気味に見えるのはきつと俺が勘違いをさせたみたいだな。

「それでもないけどそうかな。日曜どろでしろう？」

「…いいよ。デートね」

…まあいつか

「うん。エスコートさせて頂きます」

止まってまるで執事のように右腕を胸の前にもっていきお辞儀をする。その様子がおかしかったのか奏ではさっきまでの不機嫌が直って笑顔になった。

「はい。是非楽しませてください。楽しみにしていますわ」

スカートの両端を持ってお嬢様の様に軽いお辞儀をした。

可愛い…やっぱり惚れちゃったかも…

恋の予感？（後書き）

感想いただけると励みになります！

裏の裏は表なの？（前書き）

休みではない…ゴールデン…

裏の裏は表なの？

2人で食堂で待っていると一夏御一行がやってきた。

「お待たせ。うん？こっちの人は？」

奏を見て首を傾げていた。

「こちらは桃山奏さん。訓練機の貸出の書類を手伝って貰ったついでに一緒に勉強しようって誘ったんだよ」

「どうも。うちの澄がいつもお世話になっております。桃山奏でございます」

奏では立ち上がって深々と頭を下げた。

一夏はびっくりしたらしく慌てて頭を下げた。

「いえ：こちらこそ：あの：澄の：お友達で：すよね？」

えっ：一夏混乱してる。

「あらあら、ご丁寧にも…私は澄とはさっき知り合ったのよ…
って言うか私達は同じクラスよ！！」

ああ：やっぱ気付いてなかったか。

「すまぬ。うちの一夏が失礼な事を申した。私は篠ノ之箒だ」
してやったり顔の箒が『うちの』を強調していた。

「：私はセシリア・オルコットですわ」

明らかに遅れたセシリアは落ち込み気味に自己紹介をする。

ダメだ：笑いが出てしまう：みんなして奏のペースにのせられてる。奏はACEだ！！

「なんでみんなして初対面みたいに挨拶してくんのよ」

さすがに奏もイライラしたみたいでもものすごい目つきで一夏御一行を睨んでいた。

「まあまああ：奏、あまり睨まないの。せつかくの可愛い顔が台無しだよ。奏は笑ってる方が可愛いよ」

しまった…地雷踏んだかな…

まず、奏は真っ赤になってホワワ〜ンてなってる。

一夏は、二ヒヒって顔して笑ってる。

篤は、なぜか知らないけど怒ってる。

セシリアはウンウンとうなずいてる…

「うれしい…澄に可愛いって…ねえ…澄？」

ちよつと壊れかけてないですか？奏さん…

「なっ…なにかな？」

「あの…やつぱり…私ね…」

「なあ澄？」

突然、一夏が話かけてきた。

俺的には助かったが間違はなくコイツは馬鹿だ。

「…なんだ？（どうなつても知らないぞ）」

「千冬姉から『天城と放課後の訓練をする時は必ずチーム戦を行い必ず天城に指揮を執らせる。土曜日の放課後は山田先生を交えた模擬戦を行う』って言われたんだけどどういう事だ？」

はい？俺も初耳だぞ。

「いや…俺も初耳だわ。奏は何か聞いてる？」

奏の方を見ると、

「お…ら…す。…りむ…ころ…」

…

「まあいいや。織斑先生に何か考えがあつての事だろうね」

「…ガタガタ…ブルブル…」

一夏は震えてる…奏さん…ヤバいな…

「奏…ごめん…俺と奏さんは今日は戻るね」

「…ああ」

「奏、寮に戻る」

奏の両肩を持ちさとすように食堂を出た。
食堂を出たところで

「プププッ…」

と笑い声を我慢する音が聞こえてきた。

「奏かな…」

「分かった？」

「奏って何者なんだい？」

「パンピーだよ」

「パンピーが殺気を操作するの？」

「あん時は本気で怒ってた」

「そつか…ごめんな…なんか嫌な思いをさせちゃったかな」

「ううん…別に澄のせいじゃないよ」

どうして一夏達がいるとこういう風に落ち着いて話が出来ないのかな。仕方ないか。

「そつか。じゃあ今が6時だから1時間後に一緒に夕食なんかどう？7時なら大分空いてるんじゃない？」

のんびり夕食を食べながら話をしたかった。

「いいね。じゃあ7時に寮の入り口でいいわね」

「オツケイ」

やっぱり落ち着いて話が出来るよね…

7時に寮の入り口に行くと私服姿の奏が立っていた。

上はロングTシャツにカーディガンを羽織り下はジーパンという普通の格好だけど…

ヤバイ…

ジャージの俺は…

「ごめん…待たせたかな」

「大丈夫」

「…ジャージはまずかった…よね」

頭を掻きながら頭を下げてみました。

「別に外食をする訳じゃないんだしいいんじゃない。それに私が良いって言ってるんだから…いいの」

良かった。

「じゃあ行こうか」

「うん…じゃあ澄、エスコートよろしくね」

2人並んで歩き始めた。

なんとも慌ただしい入学初日だった…

裏の裏は表なの？（後書き）

眠い…

でも感想お願いします（・|・:;）

守ってやんよ？(前書き)

雨がしとしと…

『えむつえむつ！！』の作者が亡くなりました…アニメを見てラノベを読んだ身としては絶筆は非常に寂しいです…ご冥福をお祈りします。

守ってやんよ？

次の日…

朝起きて制服に着替えて部屋を出て食堂に向かう。食堂は教室のある建物にあるので寮に戻らなくてめ良いように準備をしてから部屋を出た。

1階の寮の入り口に奏が立っていた。

「奏、おはよう」

「あつ、やつと来たな。おはよう」

待っていてくれたんだ。

「待たせてごめんね。時間を教えてくれたらちゃんと来たのに。したらさ携帯番号とアドレス交換してくれないかな？」

携帯を取り出して携帯を開いた。

「え！？いいの？それって学園中の女子が知りたがってるトップシークレットなんだよ」

「もちろん奏だけにしてほしいな」

「もちろん！誰にも教えないよ！」

奏は顔を真っ赤にしながらびっくりしていた。

「じゃあ赤外線でもいいよね」

携帯を操作して奏と番号とアドレスを交換した。

奏は嬉しそうにはにかんでいた。

可愛いなあ。

「これでいいね。じゃあ行こうよ」

2人して並んで歩くと周りの女子達の声が聞こえてくる。

「ねえ！天城くんが誰かと歩いてる…」

「あの子ってクラスの子だよね…きのうの放課後も…」

「もしかしてあの子…天城くんの…ウッソー…」

「つたくウザイかな。」

「大丈夫か？」

「うん？なにが？」

奏：「お前は間違いなくACEだよ。」

「澄の朝はトースト派なの？」「まあね、ブラックコーヒー、トーストとスクランブルエッグにケッチャップ派なんだよ」

「ケッチャップ！？」

「うん。ケッチャップ」

「へえ、ソースはいたけどケッチャップは初めて聞いたなあ」「やつてごらんよ。結構いけるよ」

朝食のトレーを持って席に移動をすると一夏御一行が朝食をとっていた。

「おはよう、一夏御一行様」

「おはよう、澄」

一夏御一行がすでにテーブル席についていたが4人席に3人座っていたのですぐに別のテーブルを探しに移動する。

「澄、一夏達はほつといてもよかつたの？」

「テーブル席埋まつたから良いんだよ」

「別に私でも良かったのに」

「俺はそんな薄情じゃないよ。せっかく待っててくれたんだから一緒に食べようよ」

またまた奏の顔が赤くなっていた。

「そっそうね。あそこでいいかな」

窓際の2人席が空いていた。

奏：「周りの目は全く気にならないんだな。ってか気にしないんだな。」

お前はすげーよ。

2人で席に座ると食堂の中の視線が一気にこっちに向いた気がする……いや向いた。

そして外野の声が聞こえてきた「ねえねえねえ、なんであの子が天城くんと一緒にご飯食べてるの!？」

「ええ〜、なんかつままない……」

「ちよつとあの子誰なのよ」

「あの子……」

「ウザくない……彼女なの……」

いい加減ウザいなあ……

ぶちっ!!!

「おい!!! てめえーらヒソヒソとうるせえーんだよ!!! 言いたい事があんなら目の前に来てはつきり言え!!! てめえーらと奏の違いはなあちよつとした勇氣なんだよ!!! もし奏にちよつかいだしてみろ!!! 俺がちよつかい出した奴の相手になつてやつからよ!!!」

ふう〜

さすがにあれだけの大声をだしたらみんなもビビってくれるよな。ちよつと静かになつてくれるだけでいいんだよ。

「「「「「キヤーーーーー」」」」」

えっ……

「聞いた!? かつこよくない／／／!？」

「悪！？正義の味方！？悪かつこいい…／／／」

「やられたいかもお／／／／…」

「縛られたいかもお／／／／…」

逆効果だったかな…

「奏すまん…」

「……」

「奏さん？どうした？」

「…守ってくれるの？」

「うん？」

「澄は私を守ってくれるの？」

「ああ。奏も守ってやるよ」

なんだかプロポーズっぽい事を言っちゃまったな…

「澄…いきなりどうしたんだ？」

「ああ…一夏か」

「いきなり大声出すからびっくりしたぜ。いったい何があったんだ？」

「いや…ヒソヒソとうるさかったからちょっとビビらせよう…」

「切れちゃったんだ…」

「うん／／／／」

「分かるよ…」

はあ、と2人してため息をついていると入口の方から手を叩く音が聞こえた。

「お前ら食事にどれだけ時間をかけてるんだ！食事は効率良くしろ

！！」

織斑先生が鬼神がごとく大きな声を出していた。

カツコいいなあ……

「天城！私の顔になんかついてるか？」

「いいえ！かつこいいと思っただけです」

焦って思ったことを口に出してしまった。

「なっ……！？からかっているのかきさま／＼」

え……紅くなってる……

「すみません！！」

危険を察知したので謝りました。

「まあいい。それでちゃんと読んだのか？」

「はい。戦闘と戦術の違いは分かりました」

「そうか。全体を見回す目をちゃんと持っておけよ。いいな」

もしかして……って言うか間違いなく織斑先生は俺を指揮官にするつもりだ。

織斑先生から貰った本も戦術と戦闘のパターンも載っていた。そして戦闘中の心得も書いてあった。

ただ……俺にその資質はあるのか？ないように思える。

「先生、俺に資質はあるのですか？なぜ俺が指揮の勉強を？セシリアの方が向いている気がします」

「セシリアは無理だ。アイツはすぐに熱くなる。指揮官は熱くなったら終わりだ。今のところ向いているのは天城と桃山ぐらいだな」

桃山はどちらかといえば戦闘指揮だな」

「俺、さっき思いつきりキレて怒鳴ってましたけども……」

「……しらん。それに本気じゃないんだろ」

…ごまかされたか？

「それになぜ集団戦闘が前提なのです？そもそもISの軍事利用自体が違反なのに」

「お前は集団戦闘が絶対に起きないと言い切れるのか？コアの偽造は間違いなくないって言い切れるか？そこら辺を考える。知っておいて損はない」

それもそうか。

「そうですね」

「わかったのなら励めよ」

朝食の続きをする。

「澄、なんだかさ…この後大変な事になるような気がするのは私だけなの？」

「そうだな、今年は男もISを動かしちまったからな。それがどのような影響を与えるかな。そのためにテロやスパイとかが増えるのかな」

「って事は自分の身は自分で守れるようになれか…」

「まあIS学園に表立って攻撃する奴はそうそういないって思いたいかな」

コーヒーを一口飲む。

酸味が少なめで苦味がちょっと強めなのにコクがある。
良い豆使ってるのかな。

「ちょっと急ごうか」

「そっだね」

教室に來るとクラスの女子達の視線を一身に浴びる。

奏と一緒に来たからか…それとも食堂での騒ぎのせいか…

「ねえ天城くん…」

「はい？」

「あのね…天城くんと桃山さんは…その…」

「まだ付き合っていないよ」

「そっ…そうなんだ…」

突然話かけてきたショートボブの女の子はちょっと嬉しそうにグル
ープへ戻っていった。

やっぱり女子高なんだなあ。

「SHRを始めます。席についてください」

今日も大きめの眼鏡と服を着た山田先生が入ってきた。

「皆さんおはようございます。連絡事項ですが…」

山田先生が連絡事項だのなんだのと話をしている。

ISは宇宙活動の為に篠ノ之

東博士が開発したパワードスーツ。しかし宇宙での使用は発達せず
軍用への進化ばかりが進んでいる。きつと篠ノ之博士も嘆いている
だろうな。

平和な宇宙開発の為に物が軍用ばかりに使われる。

まあ軍事技術が世界の技術を発展させたと言っても過言じゃないん
だよな。

無線機は携帯電話へ、六分儀はGPS何だかんだで軍事は民需を伸
ばす。仕方のない構図なのかもしれないな。

「天城くん！分かりました？」「はい！？何でしょうか？」

突然話かけられてびっくり…

「話聞いてなかったですね。天城くんはこの後に第2アリーナの格
納庫に行ってください」

…なんで？

「はい」

「場所は分かりますか？」

「分かりません」

「困りましたね。ではこの後天城くんを格納庫に連れて行ってくれる人いませ……」

「じゃあ桃山さんをお願いします。いいですよ？用事が終わったらそのまま実習ですね？」「はい。そのまま実習で」

また始まった……

「あつ……また……桃山さんだ……やっぱり……」

「ねえねえ……天城くんって桃山さんのこと……」

「でもさあまだ2日だよ……」

「縛られたいかなあ……／＼／＼」

はあ……女ってすげえな……以外と男以上に欲望に忠実なのかも。

「ではSHRを終わります」

波乱の1日が始まる予感がするのはなぜかなあ……

守ってちゃんよ? (後書き)

お願いします。

感想・ご意見をください m ((m

相棒は誰？

第2アリーナの格納庫に向かっている。

「格納庫になんの用があるんだ？」

「いや…私に聞かれてもねえ」

まあ…確かに。

格納庫に着くと織斑先生が仁王立ちしていた。

そして後ろには待機中の2機のISが鎮座していた。

「来たな。桃山が一緒なのも予定通りだな」

え…

なんで予想通りなの？

「お前たちに学園の専用機を貸し与える。これから学園にいる間は
この機がお前たちの専用機になる」

…

…

はい？

「あの？質問良いですか？」

奏も困惑した顔で織斑先生に手を上げている。

「なんだ？」

「天城くんは世界で2例目のケースだからって理由で納得出来ませ
けど…私は？」

「それは、お前が天城に惚れているからだ」

この人はいきなり…何を言い出すんだ!!!

ポツ／／／…

へ？

奏さん紅くなって終わりですか…

「冗談はさておきおまえ達にはペアを組んで貰う。ただ天城に関し
ては3年間降ろす事はない。だが桃山は天城との相性が悪ければ変
更もある。以上だ。とにかくこのISに慣れる」

「はあ」

「返事は『はい』だ!!」

「はい!!」

2人でアリーナ更衣室に向かっている。2人共困惑している。

「奏、ごめんね。俺に巻き込まれたね」

「謝らないで。私はうれしいよ。澄と一緒に戦えるんだし、それに

「一応専用機も与えられたんだからさ」

奏はさつきと一転して喜んでいるみたいだ。

「そっか。なるべく足を引っ張らないように頑張るからよろしくね」

「うん。私も降ろされないように頑張るよ!!」

それぞれ更衣室前まで来て男女よの更衣室に別れて入って行った。

実習グラウンドに着いた俺たちを待っていたのは『驚愕』という表情がピツタリの顔をした同級生達だった。

それもそうだろう。いきなり専用機持ちが2人も増えたんだからさ。しかも1人は転校生でもなんでもなくいきなり選ばれたんだからさ。それも『側にいたから』的な理由でね。

まあとにかくみんな驚いてたね。

あ…訓練機の申請書が無駄になっちゃったな。

無駄にはなっていないか…あれのおかげで奏と仲良くなれたんだし。

「ではこれからISの武器の実射を見て貰う。セシリア、天城、桃山、前の標的を撃て」

織斑先生の指示に従い俺の専用機『ラファール・リヴァイヴカスタム・タイプC』の武装一覧を確認し見覚えのあるアサルトライフルを具現化し標的に向けて構えた。

アサルトライフルの特徴は単発、3発、連発の切り替えが可能で汎用の中離射撃銃火器である。

検査所でも何度か扱ったことのある武器だったので今回の射撃に選んだ。

モードは単発。距離と風速はISが勝手に補正をかけてくれる。後は照準にターゲットを入れて…撃つ！撃つ！撃つ！撃つ！撃つ！5つあったターゲットに見事に穴が空き点数が表示される。

『440 point』

一応3つのターゲットは中心に当たり残りは中心より1つ外であった。

ISの力を借りて行つての射撃としては普通ぐらいだろう。

「よし。次はセシリアだ」

次はセシリアが長距離を見せるようだ。

セシリアの専用機はイギリスの第3世代機『ブルー・ティアーズ』であり中距離攻撃を得意とする。最も特徴的なのが機体の名前の由来ともなっている無線操作による『ビット』攻撃である。詳しい事は後は知らないよ。

今回構えた武器はスターライトmk？って遠距離射撃ライフルだった。

ターゲットも今回は3つで俺が撃つた的よるも更に遠くに的があるようだ。

セシリアは自分の背丈よりも大きなライフルを構える。

そして…

バシューーン！！

バシューーン！！

バシューーン！！

「一応的に当たったのは見えただけど点数は…」

『3000 point』

満点ですね。さすがです、セシリア。

「よし。桃山、サブマシンガンを近距離の的に撃つて見る」

「ちよっと待つてください！私一回も撃つたこと無いですよ!？」

「なら撃つてみる。天城！みてやれ」

「はい」

「…はい／／／」

俺は奏の後ろに立ち

「よし。じゃあサブマシンガンを出して」

「うん／／／」

少し紅くなりながらサブマシンガンを具現化する。

「よし。そしたらまず銃床、ここを右肩にくっつけて左手は銃身のここを持つ。うん、右肘はここぐらいまで下げる」

俺はちよっとドキドキしながら奏の後ろから覆い被さる形で構え形を教える。

「よし。撃つときはセーフティーロックを連射に合わせてね。反動はISが自動で補正してくれるから大丈夫。マーカーを目標の中心

に合わせてトリガーを引く」

「…うん／＼／撃ちます!!」

奏は一気にトリガーをひいた。

バババババババツ!!!

細かいリズムカルな音をたてて銃からオレンジ色の閃光が伸びる。しばらくすると銃撃が止んだ。弾切れだろう。

「オツケだね。どう？初めて銃を撃った感想は」

「よく分からないや…」

「かもね」

奏はサブマシンガンをしまいながらキョトンとしていた。

「3人ともご苦労だった。列に戻れ。これが現在のISというものだ。本来なら宇宙に出ていく為の足掛けになるはずだったものだが今では兵器としての意味合いが強い。だが兵器として考えるな。相棒と考える。ISはおまえ達と共に成長する。いいな!!」

「……………はい!!」

「よし。では今日の練習はここまでにして体力錬成をするぞ」
うっそ…

「全員で隊伍を組んでグラウンド10周だ!!」

「 「 「 「 「 ええっ ！ ！ 「 「 「 「 「

「返事は『はい！』だ！！」

「 「 「 「 「 はい ！ ！ 「 「 「 「 「

この後時間目一杯走りました。
凄く疲れましたよ…

愛！？哀？（前書き）

遅れてしまいました…

この後のラウとシャルロットの扱いに悩んでいます）・「・・」（

皆さんの好みを教えてくださいm（「「（m

愛！？哀？

午前中の授業が終わり今は一夏御一行と奏で食堂に昼食を取りに来ていた。オーダーし終わって配膳待ちで並んでいるが、みんな疲れた顔をしている。しかし箒とセシリアは水面下のバトルを継続している。

はたから見てもあからさまなだ。

「…いい加減やめられないのかな」

「ほんと…好きだよな」

「好きだからこそなのか…」

「男と女って…」

「いや…この場合は女の戦いだから…」

「泥沼確定！？」

「アツハツハツハツ！！」

俺と奏で声を合わせて笑ってしまったことにまた笑ってしまい爆笑になってしまった。

大笑いをしている俺達を見て一夏御一行は不思議そうな顔をしていた。

俺はミートソーススパゲティを注文し順番待ちをしている。

第とセシリアは相変わらず言いあってるが、一夏はもう放っておいてるみたいだった。

そんな2人をよそ目に一夏と俺は話をしている。

「結局お前の機体ってどんな機能があるんだ？」

「特に特別な能力や兵装はないみたいだよ」

「へ？そうなの？ならタイプCってのは何なんだ？」

「さあ…分からない」

「だって専用機なんだから何かしらあるんじゃないの？」

「ラファール・リヴァイブは量産型だからないんじゃない？」

「あつ…専用機以前に量産型だったんだ…忘れてた」

正直なところ、俺も何かしら特別な機能があるんじゃないかって期待したけどもなかった…

まあ仕方ないよね。

「今日の放課後は専用機を使って良いんだよね？」

「もちろん」

「じゃあ放課後の訓練が楽しみだな！！」

俺達の注文した料理が出てきたそれぞれの食事をもって空いているテーブルへとむかって歩いていった。

全員がテーブルに着くと食事を始める。
うん！ほんとIS学園の食事は最高に美味しい。さすが国家で運営
してる国際的な学校だよなあ。

「なあ奏」

「なに？」

「奏のISには何か特別な機能はあった？」

「ううん。何もなかったよ」

「そっか…やっぱりないのか。…セシリア」

「はい？」

「すまないけど今日の放課後の訓練は俺達に射撃を教えてくださいな
か？」

「構いませんわよ」

「よし。そして一夏と篤は俺達に付き合って近接戦闘をして欲しい
んだ」

「え？射撃は？」

「もちろんやるさ。『援護射撃』をやってみたいんだよ」

「援護射撃？」

俺とセシリア以外が首を傾げた。恐らく言葉は知ってるんだろうけど戦闘での意味合いは分からないんだろう。

「味方が敵に対して射撃などをして見方の前進や後退を助ける攻撃の事をいうんだよ。戦闘の基本だから重要な事らしいんだよ」

「けどどうして俺や箒を混ぜるんだ？」

「援護を受ける側も連携が必要なんだよ。タイミングっていうのは実際にやってみないとわからないでしょ」

「そうだな。でもそれって1年生がやることなのか？」

もっともな質問なんだよな…その疑問は俺も感じてるんだよ。

「そこら辺は織斑先生に聞いたことあるけども、知っておいたほうがいいってね…」

「それだけ？」

「夏も呆気にとられている。」

「うん」

「はあ…」

「夏とハモってため息が出てしまった。 昼休みももう直ぐ終わってしまっ…」

午後はIS理論だ。

クラスのなかに『眠気』というガスが充満している。俺も例外なくガスを出している。

山田先生もそれに気付いているのかしきりに答えを答えさせている。

午後は珍しく織斑先生が教室にいない。だから弛んでいるのか…

「ここまでで分からないところがある人はいますか？」

山田先生が確認の為に教室全体を見回していた。だが教室は全くの無反応だった。マズい…山田先生が自信損失するんじゃないか…

「…そうですね…では続けますね」

まあいつか…

それにしても眠いなあ…

午前中のマラソンは効いたよ。あまり運動をしなかった俺にはキツいかも。

これからは体力作りもしなきゃいけないかな。

意外とやりたいことが多いもんだな。

ここ（IS学園）に来る前まではあまり楽しみではなかった。政府から半強制で入れられるんだから嫌に決まってる。しかも99%以上が女子、端からみたら羨ましがるだろうけど、こっちからしてみればこれ以上にキツイ事はない！なんでISを動かせるのか恨んだよ。

けど来て良かったかも。

予想以上にキツくなかったし一夏がいてくれるのも助かるし、奏、
篤、セシリアも普通に接してくれるし…

それがうれしい。まだ1年生だけこの感じだとあっという間に3
年が終わっちゃうそうだな。　　まだまだ先の事なのになんだか名残
惜しさがもう出てきた。

「ではこの問題を天城くん、答えてください」

「え？はい！」

突然指名されて慌て席を立つ。周りからクスクスッと笑い声が聞こ
えてくる…恥ずかしい…

「天城くん、答えてください」

「え〜と…分かりません…っていうか…聞いてませんでした。すみ
ません」

「…聞いてなかったなんて…先生泣いちゃいます…エッグ…こんな
眠い雰囲気…ヒッグ…出さなくても…ヒッグ…いいじゃないですか
…エッグ…」

泣いちゃった…

俺、泣かせたことに？

うわ…

背中に痛い視線が…

「せんせ…もう一回だけ問題お願いします」

「…答えてくれます？」

「もちろんです」

「では先生は天城くん…生徒以上の感情を持っています。天城くんはどうなんですか？」

…

…

はい…？

…

…

「あの…仰っている事の意味が理解出来そうではないのですが…」

「ですからそういうことなんです…！」

「そういう事と言われても…：…ごめんなさい…俺には他に好きな人がいます！でも先生は魅力的な女性です！ですけども先生以上に俺に安らぎと安心を与えてくれる人がいます…ごめんなさい」

「…ウエーン…！」

バタン！！タツタツタツ！！

先生…行っちゃった…

「澄…大変な事になっちゃったな…」

「あ…ああ…俺、今日は早退したいかも…」

「分かるわ…」

「俺、ついさっきまでここにあと2年ちょいしか居られないことを名残惜しいって思ってたけどさ、取り消すわ…先が恐いわ」

「つーかさ、澄いつの間に山田先生にフラグ立てたんだ？それに気づいてなかったのか…」

「一夏…」

「なんだ…」

「おまえに…いや、何でもない」

結局この後、先生は戻ってこなかった。しかもSHRは織斑先生が来てSHRが終わった後は正座でお説教を頂きました。

もちろん山田先生の事ではなく授業中にボーっとしていた事ですけどね。ただ時間は倍近かった気がする。

説教が終わると急いでアリーナに向かった。

恋させるスナイパー？（前書き）

ひとまず射撃訓練。

これでひと苦労なのだから戦闘は…（…）

恋させるスナイパー？

着替えを終えてピットでISSの装着をしアリーナに出ると既に4人がそれぞれ訓練を始めていた。

一夏と篤がブレードによる近接格闘をしておりセシリアは奏に中距離射撃を教えていた。

俺はまずは飛行に慣れなければならぬのでアリーナの上空を何周かしてみんなの所に向かうことにした。

えっと…飛行は自分の頭の先に角錐を作るイメージ…

すると…飛んだ！！

よしっ！！飛べた…んじゃスピード上げよう！グングンスピードを上げる！

最高！！

アリーナの中を何周かすると一夏からオープン回線で通信が入った。

「おおーい、澄！いつまで飛んでるんだ？」

「おお、すまない。今降りるよ」

そのまま一夏達の所に降り立った。

なかなか気持ち良かったなあ。それにしてもISSってなんで飛ぶんだ？

「随分と飛ぶのうまいな…何でもう飛べるんだ？」

「うん？検査の時に何回かやったからかな。あと射撃も剣術もね」

「え！？んじゃあもしかしてある程度の操作は出来るの？」

「一応はね」

「搭乗時間は？」

「多分20時間じゃない？飛行は射撃とかにくらべて割合はかなり少ないけどね」

「え？長いな…」

「時間はねその代わり広い所で戦闘はないから」

俺のいた検査場？所？は結構狭い所だった。国家の検査機関のはずなのに：おかげで窮屈な操縦しかできなかったのだ。

「それじゃ俺もセシリアに射撃を教わるから箒と近接格闘を続けてくれよ」

「おう、分かった」

「仕方ない、鍛えてやろう」

「よろしくな箒」

軽く笑みを浮かべると箒は紅くなっていた。

可愛いなあ〜

「セシリア頼みます」

「…なんだか納得がいきませんがよろしいですわ」

「セシリアさん勘弁してあげて…きっと澄も考えがあってなんだからさ」

この後はちよつとしたゲームを考えてるよ。

「では中距離も遠距離も基本は一緒ですが照準を合わせるだけでなく相手の動きを読むか、もしくは誘導などが必要になってきますの。たとえば相手が右に逃げている時に相手の進路の見える所に弾道を見せたり着弾させれば相手は止まるか振り返ったりしますね。そこに隙が出来ますからそこを狙うのです。つまり相手の止まる位置若しくは後ろ側ですわ」

ほほ〜。何となく理解ができたぞ。

「ただそれをマスターするには経験と経験による勘が必要ですよね」

あれ？敬語が出ちまった

「そうですね。」

「ではまずは天城さんの腕を見せてください」

「はい。んじゃあ中距離は前回やったから今回は遠距離でいいね」
そう言いスナイパーライフルを具現化した。

「では動かした的を撃ってください」

セシリアがそう言うと一定のリズムで左右に動く的が現れた。

「あの的を狙って5発狙ってください」

スタンディングポジションで構え狙いを定める。変則的な動きを
していない分とても狙いやすい。

セシリアが言った通りに的の予想位置を計算（勘だが）して撃つ。

的の左の端に当たった。

「あら…当たった…」

セシリアがそんな事を言っていたが俺の耳にははいつていなかった。
続けざまに残りの4発も左に移動するなら更に左を狙い予測射撃を
する。中心よりずれた分をさらにずらして撃つ。数が進につれて中
心に近づいた。

「すごいですわ…どこかで教わったことがあるのでは？」

「いや…ないよ。検査の時に何回かやったぐらいだよ」

「それにしても当てすぎですわ…私の今までやってきた訓練はなん
だったのでしょうか？」

そんなにすごい事なのか？

セシリアの顔に悔しさに満ちていた。自信を損なわないようにしないと…

「よく分からないけどごめん…セシリアを馬鹿にするつもりはなかったんだ…」

「いいえ、きっと才能なんでしょうこれから訓練をすればもっと伸びますわ。楽しみで仕方ないです」

セシリアは笑顔になってくれた。

「奏はどうだい？」

「桃山さんもとても筋が良いですわ。彼女も訓練をすれば伸びますわ」

「そっか。じゃあこのままよろしく頼みます」

次は伏せ撃ち（地面に寝て撃つスタイル）で同じように規則的に動く目標を撃つ。さつきよりも銃が安定しやすい分さらに中心に近づいた。

「次は不規則な移動する的にしますね。これは動きのパターンは人間の行動パターンに近いものになってますから難しいでしょうけど誘導を行えば当てる事も出来ますわ。一撃で当てようとせず確実に当ててください」

「了解」

今回も1つの的が出てきたが動きが不規則で動きが読めない。セシリアの言った通りに的の動きを誘導するために1発を的のすぐ近

くに撃つてみる。すると弾は的のすぐ右に着弾した。すると的は左に移動を始めた。おお！成る程ね。

左に移動した的のまた左に弾を着弾させると次は右に移動を始めたので次は右に移動を始めた所で予測射撃で的に命中させた。

「さすがですね。もう命中させたのですね」

「なんとなく感覚は掴めたよ」

「ではこれからもっと訓練して速射などもできたら最高ですね」

おいおい教わろう。

「んじゃ俺は一夏達と近接の訓練をするよ」

「ええ、わかりましたわ」

ライフルをしまい一夏達の所へ向かい少しの間、一夏と等の訓練を見学する事にした。

訓練は楽しい？(前書き)

戦闘がうまく書けない(TーT)

訓練は楽しい？

一夏と箒はブレードで模擬戦をしている。一夏は一夏専用機である『白式』で名前の通りに全体的に白である。肩から羽の様なものが伸びていて上半身はシャープな感じなのに足まわりはやたらと重そうないメージなのだ。

箒は純国産のISの『打鉄』で防御力を重点においたらしい。…
バリアがあるのになんで物理防御なのかな…

箒が乗っていると似合うな…モノノフ？

白式のスペックは知らないけど専用機なんだから当然上だよな？なのに一夏は箒に押されてる…

箒の方が腕が上って事か。やっぱり機体性能がどんなに良くても使いきれなければ意味がない。

なんかのアニメで聞いた台詞だな。

『モビ○スーツの性能を生かせぬまま死んでゆけ！！』某公国ゼロ
八千小隊 ノリスケ少佐

まあ…一夏と手合わせしたいかな。 箒とやったら瞬殺されるよなあ。

箒が一夏をほぼ一方的に押しではいるが一夏も冷静に箒の攻撃を処理している。箒の上からの斬撃は無理に受けずにブレードを斜めにして受け流し、箒は流されたブレードをそのまま横からの切り払いにするが一夏はバックステップでかわす。そして箒はその間合いを詰めて下から上へと振り上げるもサイドステップでかわす…

一方的ではないみたい。一夏は攻めようと思えば攻められるのに攻めてないのかも。最後のサイドステップは自分から間合いに入って

攻撃が出来たはず。なのにしなかった。実は実力…才能？は一夏の方が上かな…

結局この後に一夏がバテて箒の押し勝ちの形になった。

「二人ともお疲れ様。いい稽古だったな」

「ハアハア…やっぱり箒は強いな。かなわないや」

「当たり前だ。貴様と違って私はずっと鍛練を続けていたのだ」

「だな…痛感してるよ。飲み物取ってくるよ」

そう言うで一夏はピットの方へ飛んで行った。

「いいコンビだな。なんだかんだ息が合ってたよ」

「え／＼／＼？」

箒が紅くなっていた。

「ん？…気付いてないならいつか」

「どついう事なんだ？」

「箒にとって一夏は攻撃がし易いんじゃないか？」

「そうだな。隙だらけで攻撃がしやすい」

「それって剣道の打ち込み稽古に似てない？」

「そうだな…まさかアイツはわざと隙を作って攻撃させているとい

うのか!？」

「俺も素人だから良く分からないけどそうかも知れないよ」

「そうか…気を付けて見てみよう」

箒は考え込むような顔になった。

「箒、すまないが相手をして貰えないか？」

「ああ…構わないぞ」

箒の返事を聞き近接武器を具現化する。右手に箒の持っている武器の半分以下の長さの、ナイフの表現の方が正しいだろう。

「では始めるよ!」

まずは俺から一気に間合いを詰めて左から横に切り払う。しかし箒に受け止められるが俺はクイックターンで更に左に回り込み背中をとる。そして次はブレードが短いのを利用して突きをかます。

箒は恐らくいきなり視界から消えたのにビックリしたのだろう。しかし右に消えたのが分かったのかすぐに前にブリストをかけて脱出した。

おかげで俺の突きはかわされた。

しかしそのまま俺もブリストで距離を詰めてすれ違い様に斬りつける。これはシールドバリアに当たりエネルギーを減らしたはず。

「くっ…」

箒のくやしそうな声が聞こえた。次は箒から攻めてくる。

俺は振り向きながら上からの攻撃を受け止め、左手のシールドをパ

「ジしてパイルバンカー《灰色の鱗殻》通称：盾殺しを箒のから空
きになってる胴体部分にお見舞い出来るところで

「決まりだよ。この威力は分かるね」

「くっ…私の負けだ。お前はなんでそんなに強いのだ？今まで何か
やっていたのか？」

「うーん…特に何もやってないよ。でも…なんかイメージが出来る
っていうのかな…なんとなく」

「…お前は才能があるのか？戦闘の…」

「言われてみれば近接も射撃も両方出来てるな。なんか…俺じゃない
みたい。」

「分からないよ。俺は俺。今回は相手を知らなかったからたまたま
勝てただけかもしれないじゃん。あまり気にしないで」
「本当になんで勝てたんだろう。」

「そうか…また手合わせして貰うからな！」

「よろしくね」

『セシリアと奏、ちょっと来てくれる？』

プライベート回線で一夏を呼ぶ。

『一夏！にやってんだ？模擬戦やるから早く戻って来いよ』

「なんて便利な機能なんだろう。凄いよなあ。」

「なに？」

奏とセシリアが来た。

「この後に2対3のチーム戦をやるうと思う。目的は射撃組と近接組の連携の向上。チームは一夏とセシリア、俺と奏と箒。勝利条件はお互いの陣地への侵入。質問は？」

「織斑くんは？」

「一応呼んだよ」

「いつそのこと一夏を落としたら終了でいいんじゃないか？」
箒さん：それはひどいだろ。

「明らかにこちらから不利なのは？」

セシリアがもつともな質問をしてきた。

「数の上ではね。けどもブルー・ティアーズの攻撃は十分2機分の能力がある気がするけど？」

「まあ確かにそうですね。分かりましたわ」

納得してくれたみたいだ。正直ブルー・ティアーズは厄介だ。中々遠距離をカバー出来るんだから十分に支援を出来る。さらにブルー・ティアーズって無線兵器は尚更やっかいだ。

「お待たせ」

一夏が戻ってきた。

「うっし。チーム戦ね。勝利条件は相手陣地への侵入。チームはセシリアと一夏ね。いい？」

「ああ、わかった」

「よろしくお願いしますね、一夏さん」

セシリアが紅くなって一夏に笑いかけていた。

ゴトゴトゴト...

篝さんの方から黒いオーラが...

戦闘開始？（前書き）

難産でした…

とても難産でした…

遅くなつてすみません…

戦闘つす。

戦闘開始？

「では始めるよ。開始！」

俺の合図とともに両方の陣地から銃火器による射撃が始まった。こちらは奏と俺ののアサルトライフル、むこうはセシリアがスターライトmk?で撃ち合いお互いを牽制しあっている。
ブライベート回線で箒に指示をいれる。

「箒は一夏を抑えてくれ。ただし無理に倒そうとしなくていいからね。むしろ押されている振りをしてこちらに引きつけてくれ。そしてこちらからも攻撃をする」

「分かった…だが卑怯ではないのか？」

「卑怯か…確かに卑怯かもしれないけど決闘ではないんだから弱いところを突くのは兵法の基本なんだよ。これはチーム戦だから割り切ってね、箒」

「いいだろう。では引きつけにかかるぞ」

箒は一直線に一夏へと飛びかかっていった。上に振りかぶり一気に振り下ろす。だが一夏に受け止められる。

「よし！奏！セシリアに向けて射撃だ。こちらが数で有利なんだから手数で勝負だ！」

「分かったわ！」

俺は装備の中からアサルトライフルを具現化してセシリアへと撃つ。

2人から集中攻撃を受けたセシリアはさすがに移動を始め一夏への援護が出来なくなる。

そして箒が一夏との間合いを詰めてブレードでの斬り合いを始める。一夏はセシリアが気になっっているのか動きにキレがない。箒はそんな一夏を容赦なく攻め立てる。

「一夏！目の前の事に集中せんか！」

いい加減怒ったのか箒が一夏に怒鳴りつけている。

駄目だよ箒…カッとなったほうの負けなのに…

「箒、引き付けてくれ」

「…分かった」

「奏、リロードだ！箒が一夏を引き寄せろ。一夏かが来たら集中砲火！」

「OK！」

俺が奏をカバーしている間に奏がアサルトライフルを粒子化して別のアサルトライフルを具現化する。それを確認すると俺もアサルトライフルを粒子化して次は両手にサブマシンガンを具現化した。箒はうまくこちらに一夏を引き寄せ始めた。一夏がこちらに来た。

「よし！一夏に攻撃！セシリアは俺が押さえる！」

奏が一夏に攻撃を始めると俺はセシリアに高速で近付き近接射撃を

行った。

近接でサブマシンガンを撃たれるとセシリアは後退しながらビットで攻撃をしてきた。

4機のティアーズが俺を取り囲み死角から攻撃をしてくる。

一発の攻撃は弱いが無敵な攻撃に徐々にシールドエネルギーを削られていく。

まずい…早く一夏を落としてくれないとじり貧だ…

「奏！ 箒！ 急いでくれ！ こっちが保たない！」

「わかったよ！ 篠ノ之さん！ 出来るだけ抑えて動きを止めて！」

「分かっている！ でえあああ！」

箒は急加速をかけ一夏に肉薄して鏢迫り合いに持ち込む。

これに合わせて奏でも一夏に向けて急加速をしながら左腕のシールドをパージしてパイルバンカーを出し一夏の後へと回り込んだ。

それにセシリアが気付き奏でに攻撃をしようとす。

「させるかあ！」

俺は一夏に気が向いた事によりティアーズの攻撃がやみ、余裕が出来た。一夏とセシリアの間に牽制射撃をしかける。セシリアは俺からの射撃をうけて一夏に近づけなくなった。

「くう…邪魔しないでいただけますか！？」

「お互い様だよ！」

奏は一夏の後ろへと回り込み背中へとリボルビングのピルバンカーを連射した。

ドン！！ドン！！ドン！！

大きな音をだしながら杭が撃ち込まれた。

一夏のISは絶対防御が作動しシールドエネルギーを一気に減らしそして…

シールドエネルギーが0となり戦闘不能となった。

「クッソー！！」

一夏の白式はドロップアウトした。

これで俺達のチームが断然有利になった。

一人になったセシリアはティアーズで牽制をしながらスターライトmk?で仕留めようとするが箒の近接攻撃、奏と俺の射撃でなかなか的がしぼれない。

「くっ…」

セシリアはだんだんと後退していきアリーナの端の方へと追いやられていく。

そして壁際へと追い詰められたセシリアはティアーズで応戦するも箒からの斬りつけ、奏と俺の射撃を受けてどんどんとシールドエネルギーをすり減らす。

そして勝利条件である『陣地の制圧』が完了した

「もうOKだろ。やめにしよう」

「…そうですね。私も打つ手がありませんわ」

セシリアは俯きながら悔しそうに返事をした。
相当悔しいだろうな…

「じゃあ今日はここまですべてにして食堂でみんなで反省会をしようよ」

全員でピットに向けて移動する。
さすがに疲れたなあ。

反省かい？（前書き）

1日空いちゃいました…
すみません。

反省かい？

ピットから食堂の移動はかなり賑やか…騒がしかった。

「わたくしは勝ちを譲ってあげたのですわ！！！」

「何を言っている！！少しも良いところが無かったじゃないか!？」

「そういつあなただつて一夏さんをあんな卑怯な手段ではめるなを
て最低ですわ！！！」

一夏の虜コンビが言い合いを始めていた。

「くっ…あつ…あれは作戦だつたんだ！」

「そうだよ。あれは立派な作戦だつたんだよ」

見かねて俺は口を出しちゃった…

「そんなこと言われましても…」

「いい？作戦つて言うのは相手の弱いところを突くのが定石なんだよ。決闘ならば卑怯な行為でも戦闘ならば卑怯なことも立派な戦術なんだつて…つて本に書いてあつたよ。だから決闘と戦闘を勘違いしてはいけない。もし割り切らないと…死ぬよ。…なんてね」

偉そうな事言っちゃったなあ…

「しかしそんな事は綺麗事ですわ！！！」

さすがイギリスの方だな…紳士の国だなあ。決闘の習慣があるとやっぱり違うな。

「そうだよ。結局は戦争の行為はどんな事を言っただって卑怯で卑劣で非情なんだよ…破壊はなににも生まない、って俺は思うよ」

破壊は新たな建設の始まりだけどそこに至るまでの労力はとんでもないものだけだね。

「そうですね！なににも良いことはありませんわ！」

「じゃあなんでISに乗ってるの？ISだって結局は兵器なんだよ？破壊、非情、卑劣、卑怯の片棒を担いでるんじゃないの？」

奏…それは油だよ。勘弁してくれよ。

「なっ…なっ…くっ…」

セシリアは何も言い返せないよな。

ISは兵器。これは事実だもんか。

「まあ、今はスポーツ的な意味合いが強いからそこまで気にする事じゃないよ。モンドグロツソだってISのオリンピックみたいなものじゃん」

モンドグロツソ…ISの世界最強を決める大会で織斑先生は優勝したんだ。

まあオリンピックだって結局発祥は戦争って説もあるしね。

「そうですね…」

「あまり気にしないでいいんじゃないの？」

ISが世に発表されて約10年でISは確実に進化した。第2世代型から第3世代型に移行しつつある。

俺のISは第2世代型だけどね…
別に悔しい訳じゃないよ。第2世代型の量産型だってかなり使い易いんだぞ。

デユノア社のラファール・リヴァイブだって実は傑作機だと思う。
近遠選ばない武装バリエーション。攻防の選べるパッケージ。余計な物を外した時の拡張スロットル。
かなり使い勝手が良い機体だよ。

「ねえ。澄」

「ん？なんだ？奏」

「今日の組み合わせってあれは適当だったの？」

お！？よく気づいたなあ。

「お、よく気づいたなあ。実は量産型と専用機に分けたんだよ」

「なんでそんな分け方したの？」

「ん…数の力は偉大なり…あれだよ。専用機2機と量産機3機でも
対応次第では量産機の方が勝る事もあるって事だよ。つまり今のレベルでは一夏とセシリアは量産機2機の戦力にもならないって事だ

ね

「ふうくん。一夏のワンオフアビリティが発動されたらさすがに1対2でも負けちゃうんじゃない?」

「一夏のワンオフアビリティって何なの?」

「零落白夜だよ。詳しい事は分からないけどバリア無効化攻撃みただよ」

「へえ〜凄いなあ…ってかそんなの喰らったらやばくねえか…」

バリアを貫通しての攻撃ってことは絶対防御(操縦者を守るバリア)も無効化してしまう。

なんつうワンオフアビリティなんだよ…

「うん…恐ろしいよね」

こんな話をしているうちに食堂に着いた。ちょうど夕食時でもあったせいか食堂は賑わいを見せていた。

「夕食食べちゃうよね?」

奏はみんなに確認すると

「そうしよつか」

「そうだな」

「いいね」

「そついたしましたよう」

と全員オツケイが出たのでみんなで夕食を採ることにした。
それにしても…やっぱり女子が多い…まわりからヒソヒソ声で
『あつ！織斑さんと天城くんだ！』

とか

『やっぱり一夏くんいいなあ…』

とか

『え〜澄くんでしょう』

とか

『どっちでもいいから縛られたい』

なんてもんが聞こえてくる…
ほんとガールズトークってのは…本人に聞こえててもいいのかよ。
特に最後のは何なんだ。

「早く頼んじやおうよ。私はカツ丼
奏。」

「じゃあ俺は鯖の塩焼き定食」

一夏。

「同じ物だな」

篤。

「では私は…ミートパイにいただきますわ
セシリア。」

「んじゃ…キツパーって何なんだ…いつてみるか」
冒険屋、俺！

配膳で並んで食事を浮けっっているが最後の自分と思われる料理を見てビツクリしてしまった。

干物に目玉焼きがのっかっていた…

「あっ！それはキツパーではありませんか」
俺の夕食を見てセシリア嬉しそうにしてた。

「セシリアはこの料理を知っているのか？」

「これはキツパーって言っつてニシンの塩漬けの燻製ですわ。キツパーがあるとは知りませんでしたわ」

イギリス料理みたいだな…美味しいのかなあ。イギリス料理は不味いっつて言われてるしなあ。

「そっか。んじゃ席に着こうよ」

「はい。参りましょう」

一夏達の確保した席に座っつてみんなで食べ始めた。

キツパーは…途中でセシリアに少しあげて残さず頂きました。お

礼にミートパイを少しもらっつたが…

その時になんだか奏に睨まれちゃいました…

箒は一夏に鯖の塩焼きあげていたが何故なんだ…

みんな食べ終わっつてそれぞれ食後のお茶やコーヒーを飲みながら今日の模擬戦について話をしていた。

「やっぱりそういう事でしたのね」

今回のチーム分けの理由を説明するとセシリアは少し怒っていた。

「私たちを試していたのですわね」

「試した訳じゃないよ。数の有効性を知って欲しかったんだよ」

「なんですのそれは」

「同性能、同数の二つの組が戦った場合の結果はどうなると思う？」

「消耗戦になりますわ」

「そうだね。結果は最初に1体倒した方の勝ちになる。しかしそのまでの大差はない」

「なんで大差がないの？」
「奏が尋ねてきた。」

「これは同性能って前提の話だからだよ」

「あ…そう言うことか」
「奏は納得したみたいだった。」

「そう。同じ性能ってことは先に相手の一体を倒してしまえば攻撃力が落ちる。そうすれば相手がこちらを倒す人がいなくなるって連鎖が怒るんだよ」

「なるほど、そういう事でしたの」

「セシリア嬢には納得していただいたみたいだな。」

「専用機って言うのは凄く強いんだから早く慣れてね」

「わかっていますわ（よ）」

一夏とセシリアはハモって答えていた。

パートナー？（前書き）

悩みました…

自分でも悩んだ結果の展開です。

パートナー？

俺と奏は先に食堂を後にした。一夏御一行はまたバカ騒ぎを始め
ていた。

ほんと好きだよな…

「ねえ澄」

「なんだい？」

「その…この後の予定とかある？」

「いや、風呂入ってちょこっと勉強して寝るつもりだよ」

「そしたら…よかったら…」

「一緒にやるか？」

「えっ！？うん！！」

「そしたら…風呂上がったら俺の部屋でいい？ちなみに部屋は10
30号室だからね」

「わかった。じゃあ後でね」

そう言うと奏は走って部屋に戻って行った。

部屋に戻りシャワーを浴びてベッドに腰掛けてお茶を飲んでいる。時間を見ると既に20時30分になっていた。

ちよつと遅くなりすぎたかな…明日はISの飛行だったな…

一夏達と明日はどんな模擬戦をやるかな…

なんて考えている。

実際の戦闘なんて起きない事に越したことはない。でも実際に起きたら今のままでは戦えない。

でも誰が集団で襲ってくるんだ？ISのコアは各国や各企業が管理してるんだからそいつ等が束になって襲ってくることはまず無いよな。それにコアは篠ノ之博士しか作ってないんだから…織斑先生は何を思っでこんな事をやらせているんだろ。

横になって落ち着いて考えてみる。

どこかでコアの複製がされている？

ISに変わる強力な兵器が出来上がった？

企業や国家が束になって攻めてくる？

…

…

…

…温かい

…懐かしいかな

…昔、妹とお昼寝したときにこんな感じだったなあ

…気持ちいい

…このまま寝てたいな

…ん？俺、寝ちゃってる！！

目を開けると背中から寝息が聞こえた。誰か分からないけど俺の背中にくっついて寝てる。

…誰だ…誰なんだ？

奏だよな。勉強しようって約束してたんだから普通に俺の部屋に来るよな。

起こしちゃ悪いし気持ちいいからこのまま寝よう。

とりあえずベッド脇にあるタッチパネルで部屋の明かりを少し落として目覚ましを普段よりも1時間早くセットして目を閉じ。とても気持ちよい眠りについた。

ふと目が覚めた。寝ぼけてはいるが…

背中の中温かさがなくなってるのに気がついて後ろを見ると、やっぱり奏が寝ていた。このままでは風邪をひくから毛布をかけてあげた。そして一緒に毛布に入る。

俺は奏が好きなんだな…

「奏、好きだよ。一目惚れだね。でも奏といると落ち着くんだ」

声に出して言ってみた。

そしてまた目をつぶって寝に入った。

P i P i P i ! ! P i P i P i ! !

目覚ましが鳴ってる。

身体を起こして目覚ましを止めた。予定通りのいつもより1時間早くに起きた。

隣には奏が寝ている。

可愛い寝顔だなあ／＼／＼／

「奏、奏、起きて」

髪を撫でながら奏でを起こす。ゆっくりと目を開けた。

「…あれ…なんで澄が…」

現状を理解してないみたいだな…

「俺の部屋で寝ちゃったんだよ」

聞いた瞬間に思い出したのかそれとも頭を撫でられてるのに気付いたのか一気に真っ赤になった。

「あつ！…！…ごめん。寝ちゃったね」

「いいよ。俺も温かくて安心したよ。ありがとう」

「そんな…／＼／」

「大丈夫。いたずらはしてないよ」

「別にしてもよかったのに。むしろ歓迎？」

紅くなって下をだして笑っていた。

「お前なあ…そういう事は軽々しく言っちゃだめだよ」

「軽々しくない！本気だよ！」

「なあ奏さん…部屋に戻らなくて大丈夫？ルームメイトにバレるよ？」

そうだよ。今から帰ってバレたら面倒でしょ…

「大丈夫。ルームメイトはB.Lだから想像…妄想の邪魔さえしなきゃ害はないよ」

出たよ…訳分かんねえ。

「なんかこの学園つて変（Hen）なの多くないか？縛られたいだの、罵られたいだの、B.LだのG.Lだとかさ」

「別に普通だよ。私は中学が女子中だったんだけどやっぱり女子ばかりだとこんなもんだよ」

へえ〜奏って女子中だったんだ。

え？

「女子中ってもしかして奏はお嬢様？家裕福？」

「うん。お金持ちの分類じゃない？一応使用人いたし」

「げ…とんでもない奴だったんだ。」

「すげえ〜使用人かよ…。でもそんなの微塵も感じさせないな」

「何だろうね。別に隠してるつもりも自慢するつもりもないんだけど意外って良く言われるよ」

「だな。分からなかったもんよ」

「そっか」

「うん。でもなんでIS学園に入ったの？」

「うん。なんだろ…IS操縦者が格好良かったし色々と経験してみたいじゃん。世の中は遠回りしたほうが面白いことがあるそうじゃん」

奏は随分とポジティブですね。やっぱ…

「ねえ澄…」

「うん？」

「私ね澄が好きだよ」

「俺も奏が好きだよ」

そう言つとお互いに顔を寄せて唇を重ねた。

心臓が破裂するんじゃないかってぐらいに高鳴って頭が熱くなって
身体が震えた。緊張なんだろうな。
何秒ぐらい経ったのか分からない。唇が離れて奏を見てみると真っ
赤になっていた。

「澄……」

「ん？」

「…もう一回」

「何回でも」

結局いつもより部屋を出る時間を遅れて 朝食をとる時間もなくなっ
てしまった。

でもかけがえのないパートナーを手に入れた気がする。

危険人物・のほほん？（前書き）

原作キャラがあまり出てない気がしたので出しました。

危険人物・のほほん？

予鈴ギリギリで奏と教室に入るとみんながいつも通りに挨拶をしてくれる。なにげにそれはちょっとうれい。けど寄ってこられるのはつざい。

「ねえねえ澄くん。本当に澄くんはフリーなんだよね？」

確かこの子は前にも同じ様な事を聞いてた気がするな。

「すゝみんなはもう奏さんLOVE何じゃないの？」

ん？この袖がやたら長くて手が出てないキョンシーみたいな子は確か一夏いわく、のほほんさんだったかな？

「誰がそんなこつつ言ったんだ？」

やば…変な喋りになつちまった。

「えゝ見てれば分かるよおゝ。だっていつつも一緒だし周りの人と奏さんを見る目が違うもん」

のほほんさん…実は鋭い子？見た目に騙されちゃいけないのか？

「そうなのかな？」

「じゃあみんなに『澄くんは絶賛彼女募集中！！先着5名様には熱いキス、10名様にはハグ、30名様には一晩添い寝がついてきます』って宣伝してあげるよゝ」

「…俺はもうフリーじゃないかね。勘弁してください」

どうやら俺は爆弾を落としてしまったらしい。教室が凍り付いた。

「あゝあ、冗談だったのにいゝ」

『危険人物・のほんさん』確定だわ…マズい事になったな…ごめん…奏。

「」「」
…」「」

「」「」
…」「」

「」「」
…」「」

この沈黙は怖い…

この教室は大丈夫か？

気がついたら後ろにエージェントとかいないよな？

「エージェントがどうした？」

俺の後ろに黒のスーツを来たある意味エージェントより強いん方が立っていました。

「エージェント織斑先生おはようございま…うげっ！！」

言い終わる前に頭に出席簿アタックをいただきました！！

「誰がマトリックスの敵役だ。全員席につけ！！出血を確認する！！」

教壇に立った織斑先生は周りを見渡しいない人間がないことを確認する。

「もうすぐ学年別トーナメントだ。織斑お前は代表として闘うんだ。訓練をしておけよ。クラスで織斑を助けてあげるように。ではこの後はISの実習なので遅れるなよ。それと天城は着替えが終わったらグラウンド入口で待ってる。いいな」

織斑先生は教室を出て行った。

「一夏、着替えに行こうぜ」

「ああ、行こうぜ」

俺達は着替えるためにアリーナの更衣室に向かった。

後ろで女子が騒いでいたけど特に気にしなかった。

廊下を歩きながら（小走り）

「なあ澄、さっきのもうフリーじゃないって桃山と付き合ってたって事なのか？」

「まあそうなるね」

「そっか。おめでとう」

「サンキュー！」

「というか早くないか？いつのまにそんな仲良くなってたんだ？」

「色々あったんだよ」

「そうなんだ。なんか良いね」

「何がだ？」

「カップルっていうのがだよ」

「一夏は好きな人いないのか？」

「うーん…よく分からないんだよな」

「なんだそれ」

「好きっていう感覚？」

「ふうーん…だからか」

「何がだ？」

「こつちの話だよ。さっさと着替えようぜ」

「ああ」

喋ってるうちにアリーナの更衣室に着いた。

着替え終わってグラウンドの入口で織斑先生を待っているとジャージに着替えた織斑先生と山田先生がやってきた…気まずい…

「天城、お前のISはどうだ？」

「使い易いですね。基本は現行ラファールと一緒にしたいですね」

「そうだが練習機と違ってフィッティングが個人仕様になっている分反応が良い」

「そうなんですか。確認したかったんですが武装は勝手にインストールしちゃって良いんですか？」

「ああ、構わない。専用機だから色々カスタマイズして構わん」

「分かりました。ところでこの話をする為に？」

「いや…そうだな。機体の状態を知りたかったのだ」

何かあるな…

言葉を濁したのは言うのをためらったのかな…

「分かりました。それと…その…山田先生！すみませんでした！
！山田先生みたいな可愛い人を振ってしまいました」

90度のお辞儀で頭を下げました。

「い…いえ！教師にあるまじき行為でした…こちらこそ許して下さい
い」

山田先生も90度のお辞儀でした…なんだか教師じゃなくて…お姉
さん？友達？

「まったく…お前らは何をやってるんだ…それと天城！」

「はい！？」

「部屋でいかがわしい行為を見つけたら特別訓練をしてやるからな。
覚えておけよ」

え？

まさか…

部屋に奏が泊まったのがバレたのか？

「分かりました」

「よし！授業を始めるから並べ」

そう言うと先生達は颯爽＋危なっかしい走りで行ってグラウンドに入って行った。

何だったんだ？何を隠してるんだろ…

俺も遅れちゃマズいよな…

全力 - 2割の力で走ってグラウンドを走って列に並んだ。

着陸？否！墜落？（前書き）

大変遅くなりました!!

ちよっと忙しくてへばってました…

着陸？否！墜落？

「織斑、オルコット、天城、桃山！前に出てISの装着を行え」

俺達は前に出るとISの装着を始める。

ちなみにISは普段は待機状態となっていて何かの装飾品などになっている。

セシリアのブルー・ティアーズは左耳につけているイアーカフス。俺は左手首のシルバースレット、奏では右手首のシルバースレットだが一夏の白式は右手首にガントレット（防具）なのだ。

俺はブレスレットを右手でつかみ念じる。すると次の瞬間にはISが装着された状態となった。

「天城いいぞ」

織斑先生が誉めた！？

「おい、天城。失礼な事を考えただろ」

ばれましたか…

続いてセシリアと奏も装着した。

だが一夏がもたついでる。

「織斑遅いぞ！」

「はっはい！」

目を閉じて集中する。

一夏のISは展開された。
イメージで展開するために集中しないとなかなか展開できないらしいんです。集中力のもんだいだね。

「では今日は基本的な動作の飛行を行ってもらおう」
ISの基本の飛行。これがISが現代兵器の最大の特徴でもある。
圧倒的な飛行速度と機動力。

「では急上昇を行え」

号令と同時に一斉に飛び始める。圧倒的な速度で上がっていくのがセシリアだった。きっと機体スペックとの差だろう。続いて俺、奏と上がっていく。

奏って凄く器用なんだな。搭乗時間だって他の生徒より2時間ぐらいいしか長くないはずなんだけど普通に乗ってるし…天才なのか？

一方、一夏は少し上昇したら明後日の方向に飛んでいき垂直上昇を始めた。

「織斑！スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

「はあ…」

「返事は『はい』だ！」

「はい！」

いつも通りのやりとりだよな、これも。

はるか上空ではセシリアがすでに静止していて一夏を待っているようだった。後から俺と奏が追いついて一緒になって一夏を眺めている

た。

「一夏もあいからずだな」

「そうですね。でめ私とのクラス代表戦の時はもっと『かつこよ』
かつたんですが…って桃山さん!!」

「え?なに?凶星だったから怒った?」

「え…ええ／＼／＼いえ…クラス代表としてもっとしっかりしていた
だきたいだけですわ」

赤くなりながら言っても説得力ないよ…セシリア。

「OK!一夏にそう伝えておいてあげるね」

奏がイタズラな笑みを浮かべていた。

「なっ…余計なことをしないでいただけますか!?!」

セシリアは慌てて手をバタバタさせている。

こういうセシリアもなかなか可愛いんだよな。

『ロックオン注意』

え?自分の目の前に警報がいきなり出た。セシリアは手を上げたまま固まってるし、奏は…アサルトキャノンをこちらに向けていました…

「あ…あの…奏さん?いかがなされたのですか?」

「いやあね。なんかね怪電波を受信したんだ。その内容が『セシリア可愛いなあ』って内容だったからちよっとお仕置きしようと思っ
てさ」

さすがにアサルトキャノンをモ口に喰らったらシールドエネルギーをすべて持って行かれるんじゃないか？絶対防御は…ヤバいかな…

「いや…気のせいだと思うよ。だからしまおうよ…なあ奏」
「そっかあ気のせいなあ！んじゃあ今日は1日言うこと聞いて貰おうかな」

アサルトキャノンを収納するとロックオン警報が消えた。さすがに冷や汗かいたよ。

奏は満足したのか笑顔でこっちを見ていた。

そんなやり取りをしているうちに一夏が上がってきたので並んでの飛行を始めた。

「一夏！まだ飛行に慣れてないのか？」

「ああ。まだ空を飛ぶって感覚がいまいち掴めないんだよな。頭の上に角錐をイメージってどんなんだ？」

「一夏さん、イメージはあくまでイメージですわ。自分にあったイメージを作る方が建設的ですよ」

「イメージねえ…」

「あの…宜しければ私が放課後に教えて…」

「いつまで上にいるんだ！さっさと降りてこい！」

いきなり箒の音がオープンチャンネルにて聞こえてきた。下を見てみるとインカムに向かって怒鳴っていた箒がいた。恐らく山田先生はインカムを取られたな。

箒…ちよつとやりすぎじゃ…

「よし。次は急降下と完全停止をやってみる。停止位置は地上から10cm以内だ」

織斑先生からの指示が入った。またまた難しい技術なんでは？だつて急降下から地上10cmに完全停止ってタイミングが重要でしょ？かなりの熟練者じゃないと厳しいぞ。俺は多分無理だな。

「ではお先に」

セシリアがすごいスピードで降下していった。降下する様子はまるで青い鳥だ。

地上に向かって一直線に頭から降りていくセシリアは大体10メートル位の位置で上体を起こし逆噴射をかけて地上すれすれで浮遊状態になった。

まぢ…すげえ…さすがは代表候補生だわ。

「よし！次は俺だ」

一夏が同じように頭から降りていく。

「奏。どうなると思う？」

「ん？たぶん私たちは相思相愛だと思うよ」

「そつか。一夏大丈夫かな？」「絶対防御でちよつと痛いぐらいなのかな？」

ドーン！！

予想通り一夏は頭からグラウンドに突っ込み隕石が落ちたみたい到大穴があいていた。

「いててて…」

頭に手を当てた一夏が起きあがった。どうやら怪我もなく無事みたいだ。ある意味良かったかも。

あっ！セシリアが一夏に駆け寄っていった。怪我もないのにどうしたんだ？

「大丈夫？一夏さん。お怪我はなくて？」

「ああ大丈夫だよ…」

「そう。お怪我がなくてなによりですわ…」
なんてやり取りをしている。

セシリア…

あっ…筈も混ざった…

喧嘩になるかな。

「山田先生。俺達も始めますよ？」

「あっ…はい。始めてください」

「了解。奏、俺達は始めてだから安全にいこう」

「そうね。別に墜落してもあたしが付きっきりで看病してあげるよ」

「そっか。それも悪くないかも」

「じゃあISなしで降りちゃえ」「それはさすがに死んじゃうよ」

「それは困るかも」

「なんでよ？」

「淋しいじゃん」

「ありがと」

「うん。じゃあ行くよ」

「おう」

今のやり取り聞かれたかな…なんて考えながら二人同時に急降下にはいり一夏みたいな無理はせず二人同時に逆噴射をして1mの所で

二人共同じ位置で浮遊状態にした。
織斑先生は飽きれてはいたがさすがに一夏の手前怒ってはいなかった。

「よし。武装の展開だ！」

「はい！」

セシリアは右手に光を放ち収束するとスターライトmk?を展開していた。セシリアに続いて俺も光を放ち収束すると右手にアサルトライフルを展開する。奏もおなじくらいだった。

またもや一夏がもたついで左手にブレードの『雪片式型』を展開した。

「よし。セシリアは早かったな。さすがは代表候補生ってとこだな。天城も桃山も専用機の日が浅いのによくやった。織斑！武装の展開は0.5秒で行え！それとセシリア！武器は真横に構えるな。すぐに使える状態にしておけ」

「ですがこれはわたくしのイメージをまとめる為に必要な…」
「直せ。いいな？」

「はい…」

代表候補生も織斑には勝てないんですね…ってかここは軍隊なのか？

「オルコット、次は近接武装を展開しろ」

「はっ、はい！」

右手に光が収束されるが武器が展開されることなく光がクルクル周
り拡散される。

「まだか？オルコット？」

織斑先生のお顔が曇りました…

「くっ…インターセプター！！」

あっ…初心者のやり方だ。セシリアは近接武装の展開になれてない
のか？

初心者はイメージがうまくいかないときは武装を声に出して展開す
る。代表候補生のセシリアがやるとは以外だった。

「何秒かかっている。実戦でも相手に待ってもらおうか？」

さすが織斑先生…的確な指摘ですね。

「実戦では近接戦闘の間合いには入られません。問題ありませんわ
！」

「ほおう。織斑との戦闘で初心者に簡単に懐を許していたのは気の
せいかな」

へえ…そんな事あったのか。今度資料映像を見させて貰おうかな。

「あ、あれは…その…」

それは確かにいいかせないわな。接近戦のみの一夏と戦っつんじや
近接武装は展開出来るようになってくかないとなあ。

「時間だな。今日の授業はここまでだな。織斑グラウンドを片付けておけよ」

大穴埋めなきやならんね。どう考えても一人だと大変だよな。一夏がなんか言いたそうにこっちを見ている。まずい…戦略的撤退を…

「なあゝ澄、手伝ってくれよお」

ぐっ…きたか…

「ああ。いいけど夕飯サンキューな」

「まじかあゝ、まあ仕方ないか」

二人で穴を埋める。手で。ひたすらに…
HR間に合うかな…

哀？藍？愛？（前書き）

またまた遅くなりました。

感想、誤字脱字、誤りなどを頂けたらうれしいです。
よろしくお願いします。

哀？藍？愛？

放課後のアリーナでの自主訓練を終えて一足先に一人で部屋に戻ろうと歩いていた。今日は飛行の訓練をした。一夏のあれを見せられたらなんとかしくなくちゃならないよね。

なんとつて飛行はISの基本中の基本だからね。飛行が出来なきゃ機動が出来ない。戦闘の幅が広がらない。パターン化する。読まれる。かわされる。負ける。

分かりやすい。

しかし疲れたな…早く戻ってシャワー浴びたいな。

「ねえ！そのあんた！」

俺は後ろから声を掛けられた方向に向き直ると声の主と思われる背の低い黒髪のツインテールの日本人っぽい母性の小さな女の子が立っていた。

「げっ！一夏以外に男!？」

いきなり失礼な奴だな。

確かに俺は報道されてないけど…そういえばなんで報道されなかったんだ？

まあいいや。

「なんか用なのか？」

「あ…そう、この本校舎一階総合事務受付ってどこ？」

そう言いながらクシャクシャになった一枚の紙をポケットから取り出して俺に差し出した。

これは…

また…

「ああ、この道路をひたすら真っ直ぐだな。それで正面の建物の中の右側だったような…殆ど行かないから分かんないや。ってか忘れだな。仕方ない一緒に行くか？」

小さめのポストンバックを持つてるから転校生かなんかなんだろうな。案内してやってもバチは当たらないよな。

「そう？悪いね。よろしく」

俺が歩き始めると並んで歩き始めた。

「ねえ、あんたはここの学生なのよね？IS動かせるの？」

ツインテールは当然の疑問をぶつけてきた。

「まあな。一夏の事知ってるのか？さつき『一夏以外』って言うってたろ？」

そこんとこ重要ですよ。

「…え？まあね。知り合いって言うか仲良しって言うか…」
ツインテールがちよっと赤くなつて俯き加減に答えてた。

…またフラグ立ってる奴が現れた。

「そつか。俺は天城、一夏と同じ1組だ」

「あたしは鳳 鈴音。中国の代表候補生で今日編入してきたの」

「中国の代表候補生？そりゃまたすごいな」

学園二人目の代表候補生かよ。

「まあね」

大して凄くないみたいなお顔をしている。意外とサバサバした感じの性格なのか。

「で、天城は一夏に続いて二人目の男の操縦者なのにニュースになつてなかったけどなんで？」

「それは俺にも分からないんだ。ついさっき気がついたんだ」

「はあ？自分の事じゃない」

「まあな」

「まあいいけど」

「そうだ。一夏は1組のクラス代表なんだぜ。しかも専用機ももってる」

「え！？専用機！？どこに所属したの？」

たしか…IS操縦者はどこかの企業や国家に所属していなければならぬ、だったっけ？

「どこなんだろうな？そんな話はしてなかったしな。日本は…更識なんとかかって人だったっけ？」

「さあ。へえ〜一夏が専用機ねえ」

バックを持っていない手で顎をなでている。何を考えているんだ？

そんな話をしているうちに本校舎一階総合事務受付に着いてしまっ
た。

「んじゃ俺は戻るね」

「ええ。ありがとう」

本校舎を出るとなぜだか寒気がした。もう4月の後半なのに

：

部屋に戻るとなぜか奏がいて…目のやり場に困る格好でベッドに横
になっていた。大きめのTシャツに白のショーツ恐らくブラはない…

「おかえり、ダーリン」

「う…うん」

「おかえりのチューは？」

「…やるの？」

「…」

無言の抵抗か…

Chu

「はい、良くできました」

恥ずかしい…なんなんだこれは…

「戻るの遅かったね。どこかに行ってたの？」

奏は丸まって枕を抱いていた。可愛い…奏はきつと何を着せても似

合うんだろっなあ。

ナース、女医、スーツ、セーラー、キャビンアテンダント、まだまだあるだろっけど…相当にあつ…まずい、妄想しそう。ってか妄想した。

「あ…えつと帰り道に道に迷っている転校生がいたから本校舎まで案内してたんだ」

「…そうなんだ。どんな子だった？」

「中国の代表候補生だったよ」

「え？また代表候補生？毎年こんなもんなのかな？」

「さあね。2、3年には何人ぐらいいるんだろっね」

きつと各国の代表候補生が集まってるから結構な人数がいるだろうな。

「分かんないな…まあ俺達は学園の専用機持ちなんだから気負う事はないよね」

「そっか。仲良くやろっね」

「そっだね」

「じゃあ言うこと聞いて貰おうかな」
奏の表情が急に怪しいものになった。

何て言うか…半目でトローンとした感じで間違いなく誘われてる。

「あの…大丈夫か奏？」

「大丈夫じゃないよお〜。澄のせいですからね」

「なんかしちゃった？」

「澄がカツコイいからだよ」

空前絶後こんなにもテたことはことはない。俺は今スーパーモテ期なのかな？

「早くコツチに来てよ」

ヤバイ…

リミッターがとんぢやう…

でもこのままじゃ織斑先生の特別講習が…

「奏…落ち着いて…このままじゃ特別講習になっちゃうよ」

「だめ…早くおいでよう」

いいや。特別講習でもなんでも受けてやる。

横になっている奏の後ろ側に回って後ろから抱きしめる。

「落ち着く？」

耳もとで優しい声で囁く。きっと周りに人がいても2人にしか聞こえないだろうぐらいの小さな声。

「うん」

「ありがとう」

「なにが？」

「俺も落ち着くよ」

そう言つて首もとにキスをする。

「あ…ん…」

奏でからイヤらしい声があがった。

「大丈夫？」

「…じゃない」

「うん？」

「大丈夫じゃないよ」

いきなりこちらに向き直り俺の上に覆い被さった。

「捕まえたあ」

またいきなり唇に奏の唇を押し当ててきた。

「ん…はあ…」

どれくらいの間がたったのか…息継ぎの様にちよつとの時間見つめ合いまたそれを重ねた。次はお互いに舌を絡め合つた。

「危な…かつた」

ベットの中では二人が下着姿で抱き合つて語り合つていた。

「なんで途中で辞めちゃうのよ？」

さすがに途中で止めたせいかなりのご立腹の様子…

「ん？なんだか…違う気がしたっていうのかな？」

「何それ？」

「うまく言えないけど…俺が奏を好きな気持ちはこういう風に表すんじゃない…って言うのかな？」

よく分からないけど今回は違う。

「そうなの？私が求めても？」「かも。いつかは答えるよ。でも今じゃない気がするんだ」

愛の表現はそれぞれ違うと思う。言葉で表す人、物で表す人、暴力、行為、音楽、愛を表さないなど人それぞれ。

俺の愛ってどんなんだろう。どうこうしたい訳じゃないんだけど…でも違うんだよ。

「そっか…いつか見せてよね。澄の愛」

「うん。いつか見せるよ。だからそばにいてください」
「ギョツと抱き締める。」

奏も返してくれる。

素肌が触れ合っているところがとても温かい。

温もり…これも愛なのかな。

バディ？いいえバカッブル？（前書き）

遅くなりました。

奏が勝手にキャラ崩壊していつてしまう…

バディ？いいえバカップル？

外から小鳥のさえずりが聞こえてくる。朝がきたみたいだ。

「…はあゝあ」

ベッドの上で大きな欠伸をして伸びをする。いつもなら目覚ましで起きるのにいつもより1時間以上早く起きた。

隣には自分が好きな人が可愛い寝顔で寝ている。こんなに幸せな事はない。しばらくこうしていたい気分だが…

いけねえ…シャワー浴びなきゃな。

昨日はいちゃついていたから寝ちゃってシャワーを浴びていない。つてかシャワーも浴びずにいちゃついていたのか…

ベッドから立ち上がりシャワールームに向かう。

お湯のカーンを回すとお湯が出てきて頭から浴びる。

朝から浴びるシャワーは最高に気持ちがいい。

20分ほど浴びてシャワールームを出ると奏が目を覚ましていた。

「おはよう、奏」

「おはよう、澄」

何も言わずに唇を重ねる。

タオルで頭を拭いていると奏でが後ろから抱きついてきてきた

「あつたかあい。ねえ？あたしもシャワー浴びていい？」

「いいよ。バスタオルはロッカーに入ってるから適当に使って」

「うん。一緒に入っちゃえば良かったかな」

「シャワールームが狭いからやめといて正解じゃない？」

「くつついていられるじゃん」

…確かに悪くない。

「早く入っておいでよ」

納得のいかない顔をしていたが奏はシャワールームに入っただけだった。

奏は本当に自分の部屋で寝なくて大丈夫なのかな？

制服に着替えて携帯電話でニュースを読むが特に変わったニュースはない。どんな時代も平和な時は大したニュースは無いものだ。ちよっと起きるのが早すぎたかなと後悔してみたりする。

制服のシワを気にすることなくベッドに横になり目をつぶる。部屋にはシャワーの音が響き賑やかでもある。

これって現実なんだよな？

なんで俺が奏なんて彼女が出来ちゃってるのかな？

奏は俺がISに乗れなかったら付き合ってくれてないのかな？

何だか…嫌な考えだな。

大体俺がこんなにモテた事なのにISに乗れただけでこんなに人生が変わるものなのかな？

静は元気かなあ？

静と父ちゃんと母ちゃんは無事でいるのかなあ？

…

…
…
千春…

「澄？」

声に気づき目を開けるとTシャツ姿の奏がのぞきこんでいた。「大丈夫？なんか暗くなってるよ？」

「ああごめん。ちよつと家族の事を考えていたんだ」

体を起こしてベットに座る形になる。

「両親のこと？」

「両親ともう一人の妹ね。俺がこんなになっちゃったから保護監視がキツいだろうなあってね」

「そうだよ。要人保護ってきついらしいよね」

不定期で引越しをするらしい。ただ俺の場合はどうなのかな？報道されてないから大丈夫…とは言えないよなあ。

結局学園に来てるからもしかしたら知られたかな。

「澄にもう一人妹いたんだ？知らなかったよ」

「そうだね。下の妹の話はしてなかったね。静って下の妹がいるんだよ」

「へえ、今度会わせてね」

「日曜日に会ってみる？」

次の日曜日はデート？する事になってるんだよね。

「今回は2人がいいかな…」

「そうだね。んじゃあ機会があればでいいか」

まあ…まだ日にちも経ってないしね。

「うん。せっかくの初デートなんだからね」
楽しみかも… 人生初のデート… 何をしたらいいんだ!?
買い物? お金あまりない…
食事? だけじゃなあ…
映画? その後に食事かあ…
遊園地? 有りだな…

「日曜はどこに行きたい?」

「どこでもいいよ? ってか誘ってきたのは澄じゃん」

… いけね… 奏と出掛けたいだけで誘ったんだっただけだ。ってか告白するつもりがしちゃったし…

「いや… 希望はあるかなあ… ってさ」

「どこでもいいよん」

助かったかも…

「はいよん。んじゃ横浜に行こうか」

「うん! 楽しみ!」

奏は満面の笑顔を見せてくれた。

奏は髪の毛を拭き終わると制服に着替えに部屋へ戻って行った。

30分後に食堂入口で待ち合わせをする事にした。

部屋で少し時間を潰して部屋を出て食堂に向かう。いつもより早く起きたせいなのかいつも歩いている通路なのにいつもとは違った景色に見える。けど… 女子達のひそひそと視線はいつもとかわらなかつた。

食堂にの入口に5分ぐらい待っているといつも通りの奏がやってき

た。

「お待たせ！さあ行こう！」
と言いながら腕を組んできた！

キヤアアアア

！！！！

とか

ええええツツツ

！！！！

とか

……………クソツツツツツ！！！！

なんて悲鳴やら舌打ちやらが聞こえてきた…

「おいつ！奏…勘弁してくれよ…今日一日大変な事になっちまう…
つてかなる」

正直背中に嫌な汗をかいちまった。

「え？別に見せつけちゃえば誰も手を出して来ないでしょ。だって
さ、私達はいわばボディでカップルしょ？」

まあ…確かにそうだな。

「まあな…ただね…この99%の世界ではかなりキツいんだよ。初
日みたいな事は勘弁だよ」

「なら私が守る！！」

なんて言って息を大きく吸うと…

「みんな！！私と天城 澄は昨日から付き合ってます！！なので
澄には手出ししないように！！！！文句のある奴はこの桃山

奏が桃山家の名にかけて相手します！！！」

：

：

：

：

：

奏…またすげえ事を…

周りが完全に静まっちゃまったぞ。

奏の桃山家ってそんなにすげえのかな？

あとで調べてみつか。

「さあこれで周りは気にしなくて良くなったよ。ご飯食べよ」

また腕を組んで券売機に歩き始めた。

俺は鰯の干物定食を奏も同じ物。

配食の列に並ぶも俺たちの前後はスペースが出来てる…

完全浮いちゃった…

俺の学園生活は大丈夫なのかな…

あつ…配食のおばちゃんも…顔がひきつってるよ…

食事を持って空いている席を探す。すると見覚えのある一行がいた。

「一夏おはよう」

「「「「」」」」

「みんなどうしたんだよ」

「いや…俺は平和に過ごしたいからさ…」一夏。

「い…いや…まあなんだ…」

簿。

「お…ホホホ…hohoho…」
セシリア。

みんな怖がつてるのかな？桃山家ってそんなにスゴイノカヨ…

「みんな心配しないでよ！澄に手を出さなきゃ害はないからさ！」
なんて笑顔で言ってる魔王がいる。間違いなく魔王だわな。

「奏！あんまり周りを困らせるな。俺はもっと平和に過ごしたいぞ」
さすがに俺もイライラしてしまった。

「なんでよ？澄が困ってたから助けたんだよ。澄が望んだ事でしょう？？」

「さすがにやり過ぎだよ。みんなの前でイチャつかなきゃ何も問題
が起きないんだよ」

「だってイチャイチャしたいし…」

「少しは自重しようよ」

「むう」

膨れた…可愛い…

あまりにも可愛いんで指でほっぺを突っついてみました。

奏はびっくりしたのか…真っ赤になって俯いちゃいました。変なと
ころでウブなんだねえ。

食堂の注目を集めてしまいました。

結局俺達はバカップルなんだね。

存在意義？

朝食を終わらせ一夏御一行と教室に行くとなんかの噂話で盛り上がっていた。

「ねえねえ聞いた？2組に転校生が来るみたいよ」

「聞いた聞いた！なんでも代表候補生だって」

「じゃあまた専用機持ちが増えるんじゃない」

「中国の代表候補って聞いたよ」

昨日会った代表候補生の話みたいだった。やっぱり代表候補生だと噂にもなるんだな。

「どんな子なの？」

「わかんない」

なんて名前だったっけ…確か『鳳 鈴音』だったよな。あつ…一夏にその子の事を聞いてみよ。いきなり一夏の名前出したもんな。自分の机に座った一夏に昨日の鳳の事を聞いてみた。

「なあ一夏。鳳 鈴音って知ってるか？」 「鳳？ああ…リンの事か。なんで澄が知ってるんだ？」

「中国の代表候補生ってその鳳の事なんだよ。昨日の夕方に会ったんだよ」

「ええ！？リンが代表候補生！？そうなのか。知らなかったな」

一夏の大きな声にびっくりしたのか周りの女子達が集まってきた。

「織斑君聞いた？2組のクラス代表が変わったみたいよ」

2組のクラス代表…何て名前だったか…分かんないや。

「え？そうなの？」

一夏はぼけ？って顔をして驚いていた。

「きつと私の存在を危ぶんでの転校かしら」

セシリア…えらい自信だな…

「まあまさかりんが代表候補生とは…ってかまさかISにのってるとはなあ」

一夏は腕を組んで考え込んでいる。それにしてもそんなに考える事か？

「一夏！お前はクラス対抗戦に出なくてはならないのだ。余計な事を考えている隙があるのか！？」

篤がなにやら怒りながら一夏に怒鳴っていた。

「そうだよ織斑くん。織斑くんが優勝すれば学食デザート半年フリーパスがクラス全員貰えるんだよ！みんなハッピーなんだよ！」
そんな賞品があったんだ…

「一夏、ともかく勝つにこしたことはないよな。訓練に付き合うから頑張ろうぜ」

一夏の肩に手を押しウンウンと頷きながら言葉をかけてあげた。

一夏は嬉しそうにはにかんでいた。

「ありがとな澄。やっぱ持つべきものは…ライバルかな？」

「でもさあ…このクラスは専用機持ちが4人もいるんだし楽勝じゃない？」

クラスメイトB…名前が分からない…子が楽観的な言葉を発している。

「優勝は私が貰うわ！！」

突然教室に甲高い声が響きわたった。教室にいた殆どの人間が教室

の入り口に目をやった。そこには昨日案内をした鳳が片手を腰にあててもう一方の手で一夏を指さしていた。

「あれ？昨日の鳳さんじゃん。情報は本当だったみたいだね」

「おう。鈴！何やってんだ？そんな事したって似合わないぞ」

一夏がさり気なく毒を吐いている。ひどい 奴だなあ。

「あんた何てこと言うのよ!？」

鳳が顔を真っ赤にして怒っている。まあ確かにあの背丈で格好つけてもねえ。

「鳳さんおはよう。ちゃんと受付出来た？」

喧嘩になる前に話題を変えよう。

「昨日の…天城君だったっけ？昨日はありがとう。ちゃんと受付終わったよ。これからよろしくね」

「うん。こちらこそ。一夏にムードがなくてごめんね。せっかくの感動の再会だったのにな」

鳳は少し俯いて赤くなってしまった。

「なっ…何てこと言うのよ…」

素直になれないみたいなんでプライベートチャンネルを開いた。

(鳳さん。別に隠さなくてもいいよ。分かってるって)

(ぐ…なに言ってるのよ…って隠しても意味ないわね。そうよ…)

(まあ…協力はしないけど相談と一夏の教育ぐらいならまかせてお

けよ)

(分かったわ)

朴念神の一夏は少し教育がいるよな。

俺が思うにプラグを立てまくるのに相手の気持ちに気付かないのは重罪だと思う。まあハッキリと気持ちを伝えない彼女達にも悪い要素はあると思うが。

教室の入り口に立っている鳳の後ろに黒い影が立った。

「邪魔だ。どけ」

そう…世界最強の女性だ。

「げっ…千冬さん…」

スバーン!!

「織斑先生と呼べ」

やはり織斑先生には勝てなかった。

「一夏!!後で来るから逃げるんじゃないわよ!!」

スバーン!!

「SHRの時間だ。さっさと戻れ!!」

またカッコ良く決めたのに退散 してきました。

授業が始まって出欠簿アタックはなりやまず…と言っても2人に
対してだが、つまりセシリアと篤だ。恐らく鳳の事が気になって仕
方ないんだろ。完全に意識はここにあらずになっている。

ようやく午前の授業もおわりみんなで昼食を食べようと食堂に向か
うと…食堂の入口で鳳が仁王立ちしていた。

「待ってたわよ一夏!!」

はあ…今日の昼も波乱に満ちそうだな…なんて少しずつ列から離れ
て行く俺。いい加減一夏につきあっていると疲れる。鳳さんには申
し訳ないけど俺はパスさせて貰うよ。

奏と一緒に購買でパンと飲物を買って屋上の芝生に来た。春らしい
暖かい日差しが眩しすぎずに降り注いでいる。俺は寝そべりながら
買ってきたパンを食べずに空をながめていた。

「なあ奏？」

「ん？」

「のんびり出来るって良いな」

「そうだね。澄は落ち着いた時間があまりないもんね」

「俺さ…ずっと生きる意味を探してるんだ」

「え？」

「なんだか…俺が生きているのには何か意味があるのかなあってさ。
俺は世界に対して何が出来るのか？俺がやってきた事は世界にどん

な影響を与えているのかって…考えているんだ」

「難しいね。それって一生かかるテーマじゃない？」
奏も一緒に横になった。

「うん…でも知りたいたんだ。絶え間なく世界は動いている。歯車は回っている。でも俺っていう歯車は回っている気がしない。俺は世界の歯車じゃないんだって思うんだ。だったら存在している意味がないってね…」

「そっか。澄は存在してないかあ。じゃあ私が好きになった澄は偽物？」

「分からないなあ…意外と別の意識の天城 澄なのでは？」

「あつ！酷いこと言ってるよ…」

「なんだかそれぐらい自分が分からない時があるんだよ」

自分の存在意義…そんなのは分かって生きている人間なんていないって分かっているけど俺は知りたい。本当はそんなものは第三者が決める事なんだろうけどね。

でも知りたかったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8178s/>

IS～インフィニットストラトス～ イージスの剣

2011年7月14日09時51分発行